
await

青海空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

await

【Nコード】

N5965P

【作者名】

青海空

【あらすじ】

高校生の狩野大海^{かのひろみ}は、三年前以前の記憶を無くしている。大海自身、正直記憶に関して興味はなかった。そんなある日。

大海が妹の栞^{しおり}と親友の霧島真吾^{きりしましんご}といつも通り登校していると、二人の女の子が二人の男に絡まれていて……

プロローグ（前書き）

どうも、青海空です。

初連載となります！

頑張って書いていこうと思いますので、どうか長い目で見てやってくださいm（　　）m

投稿ペースは、2、3日に一回くらいでやっていこうと思います（　　）
（　　）
（　　）

プロローグ

目の前では、一人の女の子が泣いていた。

涙をポロポロ零して、それを必死に両手で拭っていた。

励ましてあげたかった。先ほどからずっと泣きつづけている、自分の力ではもう止めることが出来ない、まだ幼い女の子の涙を止めてやりたかった。

でも、そんなこと出来なかった。

僕だって泣いてしまいうなのを必死に抑えるだけで、精一杯だったからだ。

空を見上げれば、分厚い灰色の暗雲が全てを覆いつくしていた。

僕たちは、裏山の少し上った辺りの開けた場所にいた。

周りを見渡せば、広がるものは焦げ茶色の土と、所々に生えている緑色のクローバー。

夏は風が涼しい（冬はとてつもなく寒いが）この場所で、僕らはいつも遊んでいた。

昆虫を捕まえてわーわー騒いだり、鬼ごっこをしたり四つ葉のクローバーを探したり……と色々馬鹿なことをしたりもして遊んできた。

でも、そんな日々はもう来ない……

「もう！　いつまで泣いてんのよ」

泣き止まない女の子を見兼ねて、僕の隣から声が聞こえた。

それは、今日でもう会えなくなる女の子だった。

「でも、もう会えなくなっちゃうんだよ！？」　　そんなの、嫌だよ

「……！」

泣きじゃくっていた女の子が、あきれ顔の女の子に思いをぶつける。
僕もそれには、同感だった。
もう会えなくなる……そんなの、悲しくないはずがない。
空の暗雲は切れそうにもなかった。

「あ、そうだ！」

しばらく続いた沈黙を打ち破って、泣いていない方の女の子が何かを思いついたように声を上げた。かと思ったら、突然裏山を下って、走って行ってしまった。

僕と、今は大分泣き止んだ女の子が啞然としている中、走って行ってしまった女の子はすぐに帰ってきた。

息を切らし、膝に手をつけて、それでも満足気な表情を浮かべている女の子の手には、白い紙の袋が握られていた。

「なに……それ？」

泣き止んだ女の子がその謎の袋についておずおず尋ねる。

「これ？　これはね、種」

「種？」

「うん！」

そう言って女の子は、種が入っているであろう袋の中身を「じゃーん！」と言って、僕たちに見せた。

そこには、白と黒の二色で彩られた種がたくさん入っていた。

「約束をしようよ」

「え？」

「私たちが再び会えるように、約束をしようよ」

女の子は僕らのことを見ると、袋の中から三つの種を取り出して僕たちに一つずつ渡した。

「ここに種を植えて、またいつか、どれくらい成長したか見にくるの。誰のが一番大きいか、競争だよ」

女の子はシャベルを使って今まで踏みしめていた地面を掘り、出来た楕円の半球の形をしたくぼみに種を植え込む。

「ね？」

「うん！　　そうしよう！　　何だか、凄く面白そう」

泣いていた女の子はすっかり元気になって、一緒になって種を植え始めた。

雲の合間から、僅かに光が差し込み、僕たちを照らし出す。

「それって、何の種なの？」

僕の質問に、女の子は待ってましたとばかりに胸を張る。

「これはね……」

瞬間。

強い風が僕に遮って、女の子の声を掻き消した。

そのせいで、何て言ったのか全くわからない。

強い風は止まらずに吹き続ける。

それと同時にノイズが入り混じり、景色が壊れたビデオテープのように横に線が生じ始めて、灰色やら白やら黒になる。

――そう。

それは、まるで……

神様がイタズラをしたかのように、余りにも唐突で……
気付いた時には、その世界から音と景色が消失していた。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

変換ミスや、あれ？ ここ変じゃね？

というような指摘など

していただけると幸いです。

また、感想や評価はつけていただけると、凄く励みになりますので
よろしく願います（<―>）

第1章 転校生（1）

梅雨が明けて、今まで休憩していた分、より強くなったように感じる陽射しに目を細めながら、俺と二人がコンクリートの坂道を上っていく。二人とは、俺の左隣にいる、おそらくは親友であろう“霧島真吾”^{りしましんご}と、右隣にいる妹の“狩野栞”^{かのしおり}だ。栞は、妹と言っても血は繋がっておらず、義妹である、らしい。

「らしい」と言うのも、それは全て栞から聞いたことだからだ。

俺は四年前に一度、勉強に関する知識及び、一般常識以外の全ての記憶を無くしている。そのため、記憶を無くした以前の記憶は、全て栞によって賄^{まかな}われたものだ。

しかし毎日を過ごすのに支障が出るわけではないので、別段気にしていない。

「はあ……」

夏の日差しが容赦なく俺達に照り付ける。

俺は、そんなバカ見たいに青い空を見つめながら、雲が出来て太陽隠さないかなーなどと非現実的なことを考えていた。

「夏だな大海^{ひろみ}」

額の汗を制服で拭いながら、真吾が俺の肩に掌を置く。

制服も今日よりブレザーからワイシャツに衣替えしたため、汗を拭うことが可能になった。さすがに、ブレザーで汗を拭う奴はいないからな。

「言われなくなっちゃってわかってるよ。というか、人が気にしないようにしてたことを、わざわざ言うな」

「まあまあ。夏だって悪いものじゃないぜ？ 夏といえば、何てっ

たって恋愛の季節だろ？」

恋愛に季節もくもあるか。

内心では罵声を放ちつつ、俺は真吾を無視する。

真吾は、とにかく女子が好きなのだ。真吾の性格は、たったの三単語で表すことが出来る。

「元気」「馬鹿」「女好き」だ。付け加えるなら「金髪」。という、何ともわかりやすい性格。

まあ、そんな奴と俺は二年間付き合っているのだが。

「真吾。あんたみたいな馬鹿と付き合ってくれる女の子なんているわけないでしょ」

と、俺の代わりに、栞が真吾の発言に「馬鹿」にアクセントを置いて答える。

「栞に馬鹿って言われたくねえよ！ この馬鹿！」

「あんたの方が馬鹿よ！ 中間試験、あたしの方が高かったじゃない」

「あれは、たまたまシャーペンの芯が切れて書けなかったただけだっつーの」

「はあ？ そっちのほうがよくぽど馬鹿じゃない」

「何をう！？」

「ホラ、やめろって」

既に日常茶飯事となった、真吾と栞の口喧嘩を二人の間に入って仲介する。

「大海、どいて。今日こそは、決着つけるんだから」

しかし、今日は栞のボルテージが二割程増しているため中々引こうとしない。真吾が尚も栞の悪口を言っているため尚更だ。

「二人ともやめろ……」

「キャアッ！」

「！」

突然、俺の声を掻き消して、前方から悲鳴が聞こえた。

こんな朝早くから、女の人の悲鳴……しかも、まだ若い声が聞こえ

るなんて尋常じゃない。

第1章 転校生（1）（後書き）

次回に続く……

毎回、この程度の短い文章を一話分として投稿していきます。

まあ、1章1章をいくつかに分けているという感じですm（　　）

m

そんな感じで行きますので、よろしくお願いします。

第1章 転校生（2）

「これは、女の子がピンチな予感！」

真吾が悪口を言うのを即刻止め、急にそこへと走り出したため、俺と栞も真吾の後を慌てて追いかける。

たどり着いた先では、蒼いロングヘアーと白いショートヘアーの同い年位の女の子二人が、黒と灰色のスーツを纏った男二人に腕を掴まれていた。それに対し、女の子二人はその腕から逃れようと必死に抵抗している。

「大海！ 行くぞ！」

「あ、おい真吾！」

真吾は一人で勝手に行ってしまった。

「仕方ねーな」

俺も真吾の背中を追い掛けて、そこへ走り出す。

「離して！」

距離を縮めると、その場のやり取りが鮮明に聞こえてきた。

「やめろおっ！」

そこへ先にスタートした真吾が突っ込み、男二人の内白い髪の女の子の腕を掴んでいた方の鳩尾をアッパー気味に殴る。

「ゴブツ！」

その男は、腹を抱えて疼くまるが真吾は男が前かがみになったのを良いことに、さらに後ろ首を肘で叩きつけて男を悶絶させた。

「貴様っ！」

もう一人の男が真吾に飛び掛かろうとするが、俺は後ろからそいつの足を掬って転倒させる。

「あ、すいません。足が滑りました」

俺は誠意の欠片もない態度で謝る。

「このガキ……!」

当然、男がキレて俺の顔面に拳を振り上げる。

「大海!」

栞の声が聞こえた。危ないと言いたいのだろう。

——大丈夫だって。

俺は心中で栞に言うと同時に、顔を体一つ分後退させ拳を避け、作用反作用の法則を用い、カウンターの要領でストレートを顔面に浴びせる。

「あ、やべ」

が、余りにもクリティカルヒットしてしまったため、俺は慌てて脈をとる。

……よかった。死んでない。

「大海の馬鹿!」

「ごあっ!」

男の脈拍を確認して安堵していた所に、栞がいつの間にか近寄って来ていて、俺の後頭部を殴った。

「何してんの!? あんた、ホントに馬鹿?」

「あ、ああ。悪かったよ。それより——」

俺は男に絡まれていた女の子二人に視線を送る。

「助けてくださり、ありがとうございました」

「……………」

すると、白い髪の子が丁寧にお辞儀をしてお礼を言った。蒼い髪の子は、黙りこくっている——というより、どちらかといえば茫然としている感じだ。

「いえいえ、全然! こんな当たり前ですから」

真吾は後頭部を摩りながら、調子よく答える。

よく見れば、この女の子二人……かわいい子だな。

歳は同じ年くらいだろうか? 見たことのない制服を着ているが……

「おまえらー! 何をしているー!?!」

「やべ、ポリだ」

見れば、向こう側から警察がこちらに向かって走ってきていた。街の人がおそらく、俺らが喧嘩していると勘違いして呼んだのだろう。

「それじゃ、帰り道気をつけてなー」

捕まると色々面倒なので、俺ら三人はその女の子二人に別れを告げ学校へと走り出した。

第1章 転校生（3）（前書き）

冬休みに入ったので、少し投稿スピードを早めたいと思います！
評価点を付けてくださった方、ありがとうございます！
これからがんばりますよ（<ω>）

第1章 転校生（3）

キンコンカーンコン。

チャイムの音と同時に六限が終了した。

結果的に俺らは朝、警察のおっさんに捕まることなく学校に着いた。

「それにしても何だったんだろうなああの男二人」

真吾が帰りのHRが始まるまでの間、椅子はそのまま、体の向きを百八十反転させて俺に話し掛けてくる。

「さあな」

確かに、あの男二人は何だったのだろうか？ 背格好だけ見たらまるで――

「何かヤクザみたいな恰好してたよな」

そう。ヤクザ。

ヤクザから、俺の頭の中でマフィアが連想された。

ヤクザとマフィアは古くから犬猿の仲であるらしく、いま現在でも冷戦状態を保っている。

俺の父親はマフィアであり、母親はマフィアとヤクザの騒動に巻き込まれて死んでしまったらしい。マフィアだからかはわからないが、父親は家に全く帰ってこないため、俺は父親の顔を全く知らない。

「席着けー。始めるぞー」

担任が入ってきて、俺は思考を停止させる。真吾も同時に前を向いた。

「今さら？ と思うかもしれないが、転校生を紹介する」

担任の報せに教室中がざわめき始める。

「先生、女の子ー？」

真吾が手を挙げて質問すると担任は「そうだ」と頷いた。その後、真吾が飛び上がって喜んだのは言うまでもない。

「入れ」

担任がドアを開いて廊下にいるであろう生徒に指示すると、廊下か

ら二人の女の子が入ってきた。

誰もが転校生の容姿に期待を持ち、その姿を見逃すまいとじつと様子を見つめる。

「あっ!」「え……?」「あ……」

俺ら三人はその姿を見て、声をあげた。

そこにいたのは――

蒼のロングヘアーの女の子と、白のショートヘアーの女の子。

そう。朝、助けてあげた二人の女の子だった。

「それじゃ、名前を黒板に書いてくれ」

その二人が黒板の方を向き、チョークで名前を書く。

「え……?」

栞が黒板に書かれた物を見て声を漏らす。

黒板には、“広瀬綾”“中澤瑞希”と書かれていた。

「栞、どうかしたのか?」

特に不審な点は見当たらないため栞に聞くが

「別に」

と、すぐにそっぽを向かれてしまった。

二人が振り返り返る。

「広瀬綾ひろせあやです。これからよろしくね」

広瀬は、にこやかに自己紹介をする。

「やっべ、超かわいくね?」「ああ。ようやく青春という名の俺の

アルバムの一ページが刻まれることになりそうだぜ」

今の紹介で大半の男子がひそひそ話し出す。相当好印象持たれてるなこの娘。

絶対、放課後になったらこの娘の周りはやじ馬共で埋め尽くされるだろう。

「中澤瑞希なかざわみずきです。これから、よろしくお願いいたします」

対照的に、中澤の方はお辞儀までする、とても丁寧な挨拶だった。

「こっちは、綺麗な人だな」「何か近寄り難しって感じ？」

周りの連中は、中澤に神々しさを感じたようだ。

俺は視線をずらして広瀬の方を見ると、たまたま目が合った。広瀬は俺と目が合

うとこちらに近寄ってくる。そしていきなり俺の手を取って言った。

「好きです！ 私と付き合ってください！」

……は？

第1章 転校生（3）（後書き）

第1章はこれにて終わりです。

短いすね、はい……

第2章は、もっと長くなりますのであしからず……（意味違うか
汗）

第2章 波乱の幕開け（1）（前書き）

第2章です！

第2章 波乱の幕開け（1）

真吾が「何で大海なんだあ！俺だって助けたじゃんかー！」と嘆いている。

しかし、そんなのはどうでもいい。ちよつと待て。今、この子何て言った？聞き違いだよな……？まさか、愛の告白なんてされてないよな？

「え？」

俺は広瀬が言ったことを理解し直すために疑問形で問い返す。

「好きです。付き合ってください」

ああ。聞き違いじゃなかった。俺は今本当に告白されているらしい。……って、何落ち着いてんだよ俺！告白されてんだぞ、おい！

「ちよ、ちよつと待て。好きって、俺を？本当に俺か？」

「そうだよ」

広瀬はきっぱりと答える。

「ちよいタンマ。だって俺と君は朝出会ったばかりかだろ？それなのに、好きって言われても……まだ君のこと全然知らないわけだから、まだそれには答えられないよ」

「……………」

広瀬は、俺の返事を聞いて下を向いた。それから、うんうん頷く。「うん。そうだよね。わかった！今は答えてくれなくていいや。でも、いつか答え聞かせてね」

広瀬が顔を上げてウィンクすると、担任に言われた席へと去った。その後のHRの間、俺はクラスの男子の視線をビシバシ喰らっていた。

「起立」

日直の号令で挨拶を済まし、やっと放課後になった。

「栞、真吾。帰ろうぜ」

「ん」「あいよ」

俺はいつものメンバーに声をかける。

「ねえ大海くん」

すると、横から広瀬の声がした。

結果的に、広瀬の電撃告白のおかげというべきか、せいというべきか、男共が広瀬を囲って騒ぎ立てるといふようなことはなかった。

「ん？ ……って、大海くん！？」

「え？ 駄目かな？」

「あ、いや、駄目じゃないけど……出会って間もない男の名前普通呼ぶか？」

「だって、大海くんって名前凄く恰好いいんだもん。つい呼びたくなっちゃって」

「まあ、いいけど……んで、どうした？」

「あ、そうだ。一緒に帰りたいなあって思っただけ。瑞希も一緒に」

広瀬の隣にいた中澤がペコリとお辞儀をした。広瀬が子猫が飼い主にミルクを求めるような目で俺を見る。

「別にいいけど……いいよな？」

俺は栞と真吾に是非を問う。

「ん」「当たり前さ」

「オッケーだって。じゃ、帰ろうぜ」

そして、いつもの三人に二人が加わって俺らは下校した。

「しかし、帰りのHRで転校生を紹介するとは、珍しいよな」
「そうですね」

「何で？」

「別に」

「ねえ、教えてくれよー」

「真吾さんに教える義理はありません」

「うわっ。何か冷たくない？」

「……………」

真吾と中澤が俺、栞、広瀬の前方で話している——というよりは、真吾が一方的に話しているのだが——。

「ねえ、大海くん」

「ん？」

「大海くんは綾に何か聞きたいこととかないの？」

「広瀬に？」

「あ、広瀬って呼んだー」

広瀬は急に膨れっ面になる。

「いや、普通そうだろ」

「駄目！ 綾って呼びなさい」

広瀬は俺をビシッと指差す。

「んな……まだ会ったばかりなんだぞ？」

「時間なんて関係ないんだってば……綾」

「でもな……」

「綾」

「う……」

「あ、や！」

「わ、わかったよ！ ……あ、綾」

「うん。オッケー」

広瀬——じゃなくて、綾は満足気に笑った。

「ねえ広瀬さん、ちよつといいかな？」

今まで話に参加していなかった栞が突然声をかける。

「……………うん」

「あ、大海たちはさきに帰ってて」

栞は綾を連れて行ってどこかに行ってしまった。

「どうしたんだ？」

真吾が俺に問うが、そんなことわかるはずもなく……

「ま、帰ろうぜ」

結局俺ら三人で帰ることにした。

「あの」

「はい」

俺は初めて中澤に声をかける。

「広瀬……綾はいつもあんな感じなのか？」

「そうですね。大海様だけではなく、誰に対してもあのように振る舞われております」

中澤は敬語キラなのだろうか？ 何か、女だけど執事みたいだな……様付けしてるし。

「しかし、告白したのは大海様が初めてでございます」

「う……」

告白についての件は余り聞きたくなかった。くそ。弱みが出来てしまった。

「中澤は綾とはどういう関係なんだ？」

「そうですね……簡単に説明しますと、召使いのようなものでしょうか」

「え？」

単に、「親友」などと返してもらわずの質問の答えに俺は耳を疑う。

「召使い？」

「はい。私は綾様に仕えております召使い……いわば、メイドです」真吾が「メイドキターー！」と雄叫びを上げているのをスルーして俺は再び尋ねる。

「何で……？」

何でメイドなんて物をやっているのだろう？ 確かに見た目は大人っぽいけど……って関係ないな。

「それが運命だった、とでも答えておきましょうか」

言っていることは臭いの、中澤は無表情で答える。これ以上のことは受け付けない、とでも言うような気配を感じたため、俺はそれ以降は何も聞かずに、真吾が中澤に「何で大海には普通に話すのに、俺には話してくれないの!？」　ねえ!」と嘆いているのをぼうつと眺めていた。

中澤は何故か真吾を「真吾さん」と呼んでいる。俺は「様」なのに……

理由を尋ねたが、中澤は無表情に「得に深い理由はありません」と言うだけだった。真吾も中澤と知り合いだというわけでもないらしい。……まあいいか。

俺は深く考えないことにして、真吾と中澤に別れを告げた。

第2章 波乱の幕開け(1) (後書き)

少し長めにしてみましたm
┌
└
m

第2章 波乱の幕開け（2）

「ただいま」

家に着いてから数十分後、栞が帰ってきた。

「おかえり。綾と何話してたんだ？」

「……綾いないから、もう広瀬でいいんだよ？」

栞が靴を脱いでリビングに入ってくる。

「いや。使い分けるの面倒臭いからいいよ」

「そう……今ごはん作るから」

家の家事は栞が全てこなしている。俺も手伝おうとしたが、栞にとっては迷惑らしく「『小さな親切大きなお世話』って言葉知ってる？」と言われ、邪魔者扱いされてしまった。

「なあ、ところで何の話してたんだよ？」

「別に」

栞はだんまりを決め込んだかのように、夕食作りに没頭する。

「ま、いっか」

俺は独り言を呟き、リビングに横になる。すると、栞が制服のままスカートで料理をしていたため、スカートの中が見えた。

「青縞……意外とかawaiiのはいてんだな」

俺の独り言が聞こえてしまったらしく、栞が包丁を持ってこちらに振り向いた。

「ねえ大海。死にたい？」

「すみませんでした」

即刻土下座して謝る。栞は「ふん」と踵を返し、料理に戻った。

うわぁ。やべー。マジ怖かった……ホントに刺されるかと思った。

俺は冷や汗を浮かべ安堵の溜息をつく。

栞は青縞か……。意外だよなー。栞って結構冷淡だからなー。黒とか白とか地味なものだと思ってたよ。

って、妹だぞ俺。いくら血が繋がっていないとは言え、妹のパンツ

見て興奮する兄とか有り得ないだろ。あー、別のことを考えよう。

別のこと別のこと………あれ？　そういえば明日何かあったような気が。何だっけ？

「ん」

栞が野菜炒めと豆腐の味噌汁をテーブルの上に置く。

「ああ、サンキュ」

俺は椅子に座り、「いただきます」と唱えてから野菜炒めに手を伸ばす。

「……………」

口元までそれを持って来た時、俺は栞の視線が気になり口に入れるのを躊躇った。

「どうした？」

「いや別に。早く食べなよ」

「あ、ああ」

俺は野菜炒めを口に入れる。

まさか、腹いせに味付け弄って激辛にしたとかか！？

しかし、想像とは裏腹に野菜炒めの味は普通においしかった。

「上手いな」

「当たり前」

栞も野菜炒めを口に運ぶ。

「なあ、まだ怒ってる？」

「何に？」

「いや、だからさ」

「……」

「何でもない」

無理矢理思い起こさせることもないだろう。

そう思い、俺は口を紡んだ。

狩野家では、俺の記憶がなくなって、退院した日からはいつもこんな感じだ。栞は俺に対していつも冷淡な、俗に言うツンツンしている。まあ、もう慣れたのだが。

「ごちそうさま」

「ん」

俺は食器を流し場に持っていき、水に浸す。

「大海」

「ん？」

「私って嫌な女だよね」

「はあ？ いきなり何言ってるんだよ？」

「……そうだよな。ごめん」

俺は栞に近寄り、額に手を当てる。

「熱はなさそうだな」

「うん」

「ま、今日は早く寝ろよ」

「別に体調不良ってわけじゃ……」

「まあまあ。調度いい機会だ。いつも家事全部やって疲れてるだろ？ 十二時過ぎまでいつも起きてるっばいし」

「……わかった」

栞は下を向いて渋々頷く。が、面を上げて

「ありがとう」

と言った。栞が少し微笑んだ気がしたのは気のせいだろうか？
ピンポーン。

「え？」

突然場違いな電子音が鳴った。

「俺出るよ」

俺はドアを開ける。

「こんばんは。夜分遅くに申し訳ございません」
そこには――――

「あ、大海くん！ こんばんはー」

中澤と綾が対照的な態度で立っていた。

第2章 波乱の幕開け（2）（後書き）

はあ。自分の文章力のなさに軽く落ち込む……
読んでくださっている方。本当にありがとうございます!!

第2章 波乱の幕開け（3）

「で、何しに來たんだ？」

俺ら四人は居間のテーブルを挟んで向かい合った。

「酷いなあ大海くん。せっかく女の子二人が訪ねてきたのに」

「酷いも糞もあるか。今、夜の九時だぞ、九時」

「うん」

「いや、うんじゃなくて……」

「大海、ちょっと黙ってて」「綾様、しばらくご静肅にお願いいたします」

耐え兼ねた栞と中澤が俺らを黙らせる。

「それで、ご用件は何ですか？」

「はい。実は私共、泊まる宿がないのでございます」

「はい？」

流石の栞も驚愕する。

「泊まる所もないのに、転校してきたんですか？」

「恥ずかしながら……」

「いやいやいやいや。有り得ないでしょ。親はどうしたんですか？」

「私共に両親はいないのです」

「……」

中澤の言葉に空気が重くなる。

「……それでよく転校出来ましたね」

「転校が決まった翌日に両親は死んでしまったのです」

おいおい。それはいくらなんでも……

——信じられない。

そう言おうとしたが、中澤の真剣な瞳を見ていたら言えなかった。おそらく、何か俺らに言えないような事情があるのだろう。

「迷惑なことは承知です。しかし、このままでは野宿になってしま

います。どうか、お願いいたします」

中澤が深く頭を下げる。綾も吊られて頭を下げる。

「栞」

「わかってる……いいです。中澤さんと広瀬さん、家に泊まってください。野宿なんかされて、明日学校来られても困るし」

「本当に感謝いたします」

「ありがとうございます！」

「！」

栞は綾に名前を言われてピクツと眉を潜めたが「別に」とそっぽを向き、階段を上っていつてしまった。

「大海様、ありがとうございます」

「あ、いや俺は別に」

「うん！　ありがとうございます大海くん！」

綾が俺に抱き着いてくる。

「わ、ば、馬鹿！　暑いだろ」

「いいじゃん大海くん」

「よくないから！」

俺は綾を引き離す。やべ。顔が火照ってるのがわかる……

「中澤さん、広瀬さん。まずはお風呂入っちゃってください」
背後から栞の声が聞こえた。そしてバスタオルを二人に渡す。

「下着とか服は持ってますよね？」

「それらは大丈夫です」

中澤さんが大きな紙袋を胸の前まで持って来て見せる。

「それでは綾様。入らせていただきますしよう」

「うん！　ありがとうございます」

二人が浴室に入った途端、栞がその場で座り込んだ。

「はあ。何か凄く疲れた」

「お疲れ」

それにしても栞……綾と何があったんだ？　綾は普通に接しているが、栞の綾に対する態度がおかしい。

だが、聞いても何も返してくれないことはわかっていたため、俺は何も聞かなかった。

「お先にお風呂いただきました」

「いいお湯だったよー」

二十分ほどして、二人が浴室から出てきた。

「な……」

俺は思わず二人の姿に見惚れる。

ほのかに薰るシャンプーの匂い——俺が使っているのとは別の——。濡れた髪。普段はツインテールの綾の髪を下ろしたバージョン。胸元がはだけられた、チェックの柄の青と白のお揃いのパジャマ。微かに朱を帯びた頬——

それら全てが俺の視覚を釘付けにさせていた。

「大海くんどうかした？」

「あ、いや、別に……」

俺は二人から慌てて目を逸らす。

「な、なあ栞」

「大海先入って。大海のほうが早いし」

栞が俺の聞きたいことを察して答えた。

「了解」

俺はあらかじめ用意しておいた下着やバスタオルなどを持って慌てて浴室に入った。

やばい。こんなのが毎日続くのか？
浴槽で俺は一人悶える。

そういえば、この湯舟も綾や中澤が入ってたんだよな。素肌がこのお湯に浸かって……

「うわあっ！」

俺は慌てて浴槽から出る。同時に、浴槽のお湯が飛び出し、すのこの上に打ち付けられた。

落ち着け俺。まずは落ち着け。心を無にしろ、無に……

そうだよ。普段は栞だっが入っているんだ。だから大丈夫ーって、いつも俺が先に入ってるから、関係ないんだった。

あれ？ でも、もし栞が先に入っていたとしたら、俺は今みたいに意識しちまうのか？

「……………」

待て待て待て。何を考えているんだ俺は。栞は妹だっつーの。でも血は繋がってないんだよな。

「……………」

って、もう何も考えんなバカ野郎！
心を無にしようと思えば思うほど、邪な感情が泉のように溢れ出してくる。

あーもう。今は夏なんだしもう湯舟に入らなくていいや。

俺は邪念を振り払うためにシャワーを頭から被り、さっさと頭と体を洗って出ることにした。

「うわ、大海くん早っ！」

風呂から上がると、リビングでは綾と中澤がオレンジジュースを飲んで、居間でテレビを見てくつろいでいた。

「大海もうでたの？ いつも早いけど、今日は最高記録じゃん。どうかした？」

確かに。栞の言う通り、五分以内で風呂が終了したのは初めてだ。

「いや、ちょっとな……」

「？」

俺は愛想笑いを浮かべる。栞はそんな俺を見て不思議そうに首をかしげた。

「大海様も飲みますか？」

中澤が俺に助け舟を出すように、オレンジジュースを持ち上げて尋ねる。

「ああ、もううよ」

俺は中澤に入れてもらったグラスを受け取り、中身を一気に飲み干す。

「アハハ。いい飲みっぷりだね大海くん」

「喉が渴いてたんだよ」

「ふうん。まあ暑いからねえ」

お前のせいでもあるんだがな。いや、実際は中澤もなんだが、中澤に文句を言うとは何か罰が当たりそうなんだよな。ほら。神様に文句言うのって、罰あたりだろ？ それと同じ感じに。

俺は綾が座っている真正面に腰を下ろす。

「それじゃ、私もお風呂入ってくるので、くつろいでいてください」

「はい。ありがとうございます」

栞が浴室に入ると同時に綾がテーブルに身を乗り出す。

「ねえねえ大海くん。帰り道の続きんだけどさ、綾に聞きたいことないの？」

「綾に？」

「うんうん」

「ああ、そういえばあったわ」

「ホントに？ 何々？ 何でも言ってよ」

「栞と何話してたんだ？」

綾は忽然と黙り込む。

「大海くん。女の子同士の会話を聞くななんてデリカシーないぞ」

だが、すぐにヘラヘラ笑いながら自分の口に人差し指を当ててシークレットの仕草をする。

やはり、俺には言えないことなのか？

明らかに誤魔化した綾に俺は少し不満だったが、確かに男には話せないようなことを話していたのかもしれない。

俺はそれ以上綾に尋ねることはしなかった。

それ以降、俺らは世間話をしながら葉が出るまでの時間を過ごした。

第2章 波乱の幕開け（4）（前書き）

俺と幼馴染の波乱万丈な日（改）前編

と、ほとんど同じ個所がありますが、気にしないでやってください
m（　　）m
いえいえ。決して手抜きというわけではございませんので、よろしく
お願いします（ーー）

第2章 波乱の幕開け（4）

「ひーろーみーくん。朝だよー。起きないと遅刻しちゃうよー」
「んんう？」

俺は寝ぼけていて未だに起きない。

「起きないと、大海くんの唇奪っちゃうぞ」
「うわぁ!？」

俺は布団を蹴り飛ばして跳ね起きる。

「ちえー。残念」

綾は非常に嬉しそうに言う。

「あのな……何で俺の部屋にいるのかとか、鍵閉めたのにどうやって入ったのかとか、色々ツツコミ所は満載なんだが、まず言いたい性質の悪い冗談を言うのはやめてくれ」

「あ、大丈夫。冗談じゃないから」

「尚更悪いわ!」

「あ、ちなみに、何で大海くんの部屋にいるのかは大海くんを起こすためで、どうやって入ったかは瑞希にピッキングを教えてもらったんだー」

何教えてんだあの人……ていうか、何でそんなもん知ってんだよ!

「あ、大海くん。瑞希のこと見くびってたでしょ? 瑞希は凄いだぞお」

何自分の手柄のように振る舞ってんだこいつは。

それにしても、今日の夜からどうするか。

鍵はもう意味ないし、わざわざダンス置くのも面倒だしな。

「って、大海くん! 時間!」

「え?」

時計を見ると、八時をやや回った刻。

「馬鹿野郎! 遅刻じゃねーか!」

「馬鹿? 馬鹿って……酷いよ大海くん」

「わー！ 泣くなよ綾。な？」

「嘘泣きだよ。テヘ」

「死ね！！ マジで一遍死ね！」

「ひゃうっ」

「ああもう！ さっさと行くぞ」

「ラジャーです隊長！」

綾のノリに構わないようにして、俺は朝飯を食わずに登校道を走る。

「大海くん早いよお！」

「あー遅い！ ホラ手貸せ」

俺は綾の手をとると、先に登校している栞や中澤に追い付くために全力で走った。

「大海、くん！ あ、あれ！」

「ああ。栞ー！」

数分走って、やっと栞と中澤、さらに真吾の姿が見えた。俺の声に三人が振り返る。

「よく間に合ったね」

俺は栞たちに追い付いて、家を出てから初めて走るのを止めた。走るのをやめた途端、忘れていたのを思い出したかのように暑さが急激に込み上げてきて、汗がダラダラと溢れ出す。

「あ、あちいー」

「色んな意味でな」

真吾が楽しそうに意味深な口調で言ったので俺は首を傾げた。

「大海くん。さすがにもういいんじゃないかな」

「あ」

俺は未だに綾の手を握りっぱなしだったことに気付き、すぐさま手

を離す。

こういうことか！

「わ、悪い」

「別に謝る必要はないよー。嬉しかったし」

綾は太陽の輝きにも負けなくらいの眩しい笑顔を見せた。その笑顔に一瞬ドキッとしてしまう。

「ホラ、ホントに遅刻するよ」

栞の声でハツとなり、全員が再び歩き出した。

「なあ。そういえば今日って、何かなかったっけ？」

「何か？ 今日？ 別になくね？」

昨日から引っ掛かっていたことを尋ねるが全員わからないらしく、誰も答えない。

「あの、まさかと思われませんが……」

いや、全員ではなかった。

中澤が怖ず怖ずと聞く。

「今日が期末試験だということを、覚えていらっしやらないのですか？」

「……………」

中澤の質問に、辺りが静まった。

「あれ？ 今日って期末でしたっけ、栞さん？」

「確か昨日担任が言ってた気がしなくもないわね」

真吾の引き攣った笑みに、栞も引き攣った笑みで返す。

「なあんだ、そんなことか」

「あ、期末か」

それに対し、綾と俺は能天気言い放った。

「畜生。大海は余裕だから言いよな……てーか広瀬って頭いいのか？」

真吾の疑問に綾が胸を張る。

「ふふーん。綾は何と……」

「下から数えた方が早い順位でございます」

しかし中澤が綾の言葉を遮って、現実を突き付けた。

「馬鹿じゃん」

「ううー」

「ま、大丈夫だ。俺らも馬鹿だから」

へこんでいる綾を真吾があやす。

「『ら』をつけないでくれる？」

「あ？ 栞だって馬鹿じゃねーかよ」

「確かに馬鹿だけど、あんたなんかと一緒にされたくないっての」

「何だと？」

また、栞と真吾の喧嘩が始まってしまった。

「二人共。毎日毎日よく飽きないな」

「飽きるとか、そういう問題じゃないの。こいつが喧嘩売ってくるから、買ってるだけ」

「それ逆だろ。俺は栞が売ってくるから、買ってるだけだ」

ああ。火に油を注いでしまった。こうなったら、自然蒸発するのを待っしかないな。

「ねえ大海くん」

「ん？」

「二人って、いつもこんな感じなの？」

「ああ。まあな」

「そっか。仲いいんだねー」

「ホントにそう思うか？」

「喧嘩するほど仲がいいって言うじゃん」

「まあ……な」

俺は未だに愚痴愚痴言い合っている二人を見て、ホントにそうなのかなあ？ と思うのであった。

期末試験が終了し——真吾と栞は色んな意味で——放課後となった。

「栞。真吾」

「今は話し掛けしないで」「頼む。今だけは……」

二人は完全に撃沈していた。何だか哀れに思われてくる。

今回の期末試験は、はつきり言うところそれほど難しくはなかった。授業を真面目に聞いているやつは取れる問題、といった感じだ。俺は試験勉強はしていないが、授業は真面目に聞いているため、その名残で試験はまあまあ出来だった。

「中澤はどうだった？」

「はい。内容が今までの学校と被^{かぶ}っていたため、それなりには出来たと思われます」

中澤は平然と応える。まあ中澤は見るからに頭良さそうだからな。問題は——

「綾」

「どうしたの大海くん？」

「試験、どうだったんだ？」

「あははは。わからなすぎたから、逆に笑えてきちゃった」

駄目だこいつ。早く何とかしないと。

しかもこいつの場合、反省すらしてないときた。

「まあまあ。終わったことは気にするなって言うし」

「お前は気にしなさすぎだ！」

「大海くん。前だけ見て進む人生も悪くないと思うな綾は」

「正論っぽく言うな！ それは間違っている。説明してやろうか？」

前だけ見た人生はな……」

「あ、そうだ瑞希」

「てめえ、ふざけてるだろ！」

「うん！」

「嬉しそうに頷くな！」

「だって、明日から文化祭準備で授業ないんだよ？」

「話変えんな！ ……って、え？」

俺を含む皆が不意を付かれたように黙り込む。

「そうだ、明日から文化祭準備じゃない」「やつほー！ー！！俺の時代キターー！」「そういえばそうだな」「綾様、どこでそれを？」

だが、風船が弾けたように、栞、真吾、俺、中澤が急遽^{きんぐ}四者四様に反応を示す。

その後は、栞と真吾も明るさを取り戻し、皆で文化祭についての話で盛り上がりながら帰宅した。

真吾ははぶられ気味だったが。

「ねえ大海くん」

「む？」

四人で夕食を食べていると、綾が話し掛けてきた。今日の夕食は、麻婆豆腐である。

「ところで、文化祭って何やるか決まってるの？」

綾が俺の麻婆豆腐の豆腐を奪って、代わりにグリンピースをひよいっと投げ入れる。

「いや、まだだ。明日、実行委員とか全部決めるんじゃないかなあ栞」

俺は綾から豆腐を奪い返し、綾にグリンピースを倍にして返す。

「そうだね」

栞は素っ気なく返す。

「そっかあ。そうなんだあ」

綾が何かを企んでいるような気がしたが、気のせいだと思うことにした。

「大海くん。グリンピース食べてほしいなあなんて」

「断る」

「うう……」

綾は渋々、グリーンピースを口に放り入れた。

第2章 波乱の幕開け（4）（後書き）

第2章エンドです。

次回は、ついに文化祭に入ります！！ 何となく書くのが楽しみだ
ったり（笑）

ここまで読んでくださっているみなさん。
本当にありがとうございます（＜ω＞）

次話投稿は、年が変わる前までにしようと思っています。
では～。

第3章 文化祭(1) (前書き)

第3章突入！

第3章 文化祭（1）

眩しい太陽の煌めきがうざったらしくなる真夏の暑い日。

冷房の効いた教室ほど素晴らしい場所はないと思う。

文明の進化、まじリスペクト。

そして、そんな熱を冷まさせるものがもう一つある。それは、廊下に貼り出された一枚の模造紙。

一番上段に書かれてある文字の羅列を読んでもみると――

「第一学期、期末試験成績表」

「わー！ー！　　読むなー！」

俺は隣でブルブル震えている親友に、わざと声を出して読み上げた。菜と綾と中澤は、別の場所でこれを見ているはずだ。

この学校は意外と鬼畜な面があり、一位から最下位まで全ての名前が書かれた成績表が試験後日に貼り出される。

だから成績上位者には胸を張れるものとなるが、下位者にとっては、その成績表はおぞましいものへと変貌を遂げる。

「お前なあ、そこまで嫌ならちゃんと勉強すりゃいいじゃねえか」

真吾の成績はというと――75人中75位。総合得点800点満点中88点。

余裕で赤点だらけ――というか、むしろ赤点しかない。

この学校の俺らの学年は3クラスしかない上に、1クラス25人しかいない。

改めて少子高齢化が進んでいるという事実をひしひしと感じさせる。

ちなみに俺は、75人中4位。総合得点682点。

中澤は、75人中1位。総合得点799点である。

はは。中澤の奴。ほぼ満点じゃねえか。逆にどこで落としたんだよ。

凄そうな人だとは思っていたが、ここまで凄いと……

俺は中澤の完璧さに舌を巻くしかなかった。

———そういえば、綾のやつ何点だったんだ？

俺はある種の期待を込めて、上からその名前を探す。

「……………」

そして、長らく探して見つけたその順位に絶句した。

75人中73位。総合得点90。

こいつ……まさか、ここまで馬鹿だったとは。しかも、真吾と二点しか違わないし。

———まさか、な。

俺は嫌な予感を胸に、視線を綾の下に移す。

75人中74位。総合得点89点。

……狩野栞。

俺は大きく溜息を吐いた。

そんな朝のことを考えながら、俺は一時間目のLHRの担任の話を受け流していた。

「んじゃ、あととはよろしく委員長」

担任がひらひら手を振って教室から出て行く。

あれ？ もう終わりか？

いつもよりも全然早く終わったLHRを不思議に思っていると、栞が壇上に上がった。

言い忘れていたが、栞はさりげなくクラス委員長だったりする。

栞は堂々たる面持ちで教卓に手をつき、教室を見渡す。

「それでは、今から文化祭実行員を決めたいと思います」
やべ。そういえば、明日から文化祭準備期間に入るんだった。

朝のゴタゴタのせいで、すっかり文化祭のことなど忘却の彼方へと飛んでいた。

まあ、そこまでは飛んでないが。

で、話を元に戻す。

文化祭実行員、ね。

俺は聞こえはいいその委員の名前に軽く毒づく。

実際、文化祭実行委員なんて、ただ単に面倒臭いだけだ。

ただでさえ、クラスの出し物の設備を整えるだけで精一杯になりそうなのに、さらに学校における公共の場の設備をやらなければなら
ないなんて無理ゲーにも程がある。

会議とかもあるし、クラスの予算編成も調整しなければならないしな。

だから、そんなものに自ら進んでやろうとする奴なんて、よっぽどの体力バカか、物好きくらいしかないだろう。

「はい！ はーい！ 綾、文化祭実行員に立候補しまーす」

そうだった。そういえばいたな。そんな物好きなやつが、身近に。
手を挙げたのは紛れもなく、そう。

綾である。

第3章 文化祭（1）（後書き）

皆さん、良いお年をm（）m（使い方あってるっけ？）

第3章 文化祭（2）（前書き）

遅ればせながら、あけましておめでとうございます！
今年も何とぞよろしくお願い致します m（　　） m

第3章 文化祭（2）

「広瀬さんが立候補しました。承認の人は拍手をしてください。というか、むしろ反対の人手を挙げてください」
どっちだよ。

俺は心内でツっこむ。勿論声になんか出さない。出したらーなんて、そんなこと想像したくもない。皆、パラパラと拍手をして綾を承認する。俺も流れに乗って拍手した。

「はい。静かに。広瀬さんが文化祭実行員に決まりました。では、もう一人立候補はいませんか？」

しかし、誰もが栞から目を逸らして、断固拒否の姿勢を示す。そりゃ、やりたくないわな。

で、何で俺に皆視線を集めてるんだ、おい。

「栞ちゃん」

「はい」

沈黙を打ち破って綾が期待に満ち溢れた瞳を栞に向ける。

「綾が推薦しちゃダメ？」

いや、待て。それだけは、やめろ。

「いいです。推薦してください」

待て栞！ 嫌な予感しかない！

栞は、俺をチラリと見ると――ニヤリと悪魔の笑みを浮かべた。

「やった！ じゃあ、大海くんを推薦します」

ああ。やっぱり、こうなるのか。

だが。こんなところで挫ける俺ではない。

俺にだって拒否権があるはずだ。

「では、ひろ……狩野大海に決定しました」

「ちよっと、待てよ！ 俺に拒否権は？」

「ない」

「ない！？ それ酷すぎねえ？」

栞は、やれやれと言った感じに指を額に当てて首を横に振った。

「あのね大海。推薦された人に拒否権持たせてたら、一生決まらないでしょ。だから、ないの」

「そんな……」

「ま、頑張って大海」

栞は、ポンと俺の肩に手を置いて席に戻ってゆく。

「いやいや。何で栞さん席に戻ってるんですか？」

「ん？　だって、これからは大海たちの仕事でしょ」

「そうだよ大海くん。何てたって、綾たちは文化祭実行員になったんだから」

お前が無理矢理引き入れたんだがな。

だが、決まってしまったことをグダグダ言ってたって仕方ない。俺だって男だ。

「はぁ……」

俺は綾に手を引かれ、壇上に立ってクラスを見渡す。

へえ。ここって、こんな景色なんだな。

意外と一番後ろの席まではっきり見える。逆に言うと、一番前の席の方が目立たないんじゃないか？

そうか。一番後ろが内職とかするのに安全というわけではないんだな。

これは勉強になった。

「大海くん！」

「おっと」

綾に名前を叫ばれて俺は思考回路から外れた。

「もう。しっかりしてね、大海くん？」

「ああ。悪い」

俺は頭を掻き、気持ちを切り替える。

「よし、じゃあやるか」

「うん」

「で、まずは何やんの？」

「大海くん、君って子は……」

綾にあきられるなんて、俺ももう終わりかもしれない。よっぽど委員になってしまったのが、ショックだったんだな、俺よ。

「クラスで何やるか決めるんでしょ？」

「ああ、そっか。じゃあー……」

俺はクラスに再び向き合う。

「これから、クラスでって……」

俺は議題を述べようとするが、クラスの奴らが騒がしいので一時中断する。

グダグダに決めても良い案なんか出てこないだろうからな。

やるからには、ちゃんとやりたい。

「静かにしてください」

俺は注意を促すが、全く効き目なし。

自分が委員にならなかったことに安堵し、気が抜けたからだろうが。

「静かにしろー」

二度目。

全く効き目なし。

ははは。流石に苛ついてきたぞ。

「おい、お前ら——」

「うるせえんだよ、てめえら。てめえらの代わりにやってくれてる人がいんのに、何だよその態度は？ あん？ あんまし調子乗

ってんじゃねえぞ、おい。静かにしろつつわれたら、すぐ静かにしやがれ。わかったか？」

シーン。

教室の空気が一瞬で、絶対零度に侵されたかの如く凍りついた。い、今の誰だ？

いや、んなことはわかってる。言ったのは、間違いなく綾だ。でも。

今の綾は、普段とは懸け離れ過ぎている。

それに、何なんださっきの圧迫感。あんなの、皆静まざるをえない。

……何者なんだ、こいつは。

「さ、大海くん。静かになったとこだし、進めよっか」

「え？」

が。

綾は、いつの間にか普段の綾に戻っていた。さっきの雰囲気など微塵も感じさせない。

あれ？ 気のせいだったのか？

「ほーら！ 早くやっちゃお、大海くん」

「あ、ああ」

綾に促され、俺は些か疑問を持ちつつも、再び議題の提議をするのであった。

第3章 文化祭（3）

その後、中澤の「喫茶店はいかがでしょうか」という提案に、真吾が「なら、メイド喫茶にしようぜ」という提案も出され、何故か中澤以外が満場一致でメイド喫茶をやることに賛成した。

普通なら、メイド喫茶なんて一刀両断されて終わりでもいいくらいなのに、このクラスは意外と皆乗り気らしい。

まあ、別に皆がいいならいいか。

俺は喫茶店の提案者である中澤を見ると、中澤は目を瞑ってゆっくり頷いた。皆に合わせるということだろう。

「大海くん」

「ああ。では、このクラスは、メイド喫茶をやることに決定しました」

俺の会議の締めくくりに、クラスメイトらは拍手を返した。

こうして、俺らはメイド喫茶をやることになったのだ。

「大海くんとお買い物なんて、デートみたいだね」

「あんな、綾。俺らは――」

「遊びに来たわけじゃない、でしょ？」

わかってるもん、それくらい」

綾がブスツと文句を垂らす。

「なら、いいけど」

事実、俺らは遊びにショッピングモールに行くわけではない。文化

祭の喫茶店を装飾するための物品の買い出しに来たのだ。

それに――

「大海、いちゃつくのはいいけど、本来の目的を忘れないようにね」

「何だ栞。お前大海に嫉妬してんのか」

「真吾。殺すよ？」

「栞様。真吾さんに構ってても体力の無駄ですよ」

「そうですね。無駄な体力を使わずにすみしました。ありがとうございます
います、中澤さん」

栞も中澤も真吾もみんな来ている。

相変わらず真吾の扱い酷いな二人共……

「ねえねえ大海くん。予算いくらなの？」

「全てのクラスに5万円配られていて、どうしても足りない場合は、
何に使うのかを詳細に説明すれば、足してもらえるらしい」

俺はズボンのポケットから、先程受け取った薄茶色の封筒を取り出して、
綾に見せる。

「というか、お前も実行委員なんだから、さっきの話聞いてただろ」

「え、う、うん。まあそうなんだけど、でも、大海くんがちゃんと
聞いてるかなあって確認してみたんだよ、うん。あはははははは」

綾は引き攣った笑みを浮かべる。

「お前なあ、自分から立候補したくせに、何で話聞いてねえんだよ
！」

「き、聞いてたもん！　だから、大海くんがちゃんと話聞いている
かなって確認しただけだって」

「嘘だね。自分に正直になれよ」

「ううー。確かに話は聞いてないよ……だって、第二視聴覚室って
言われても、どこかわからないんだもん。大海くんもさっさと先行
つちやうし……」

綾がガツクリと項垂れる。
うなだ

ああ。そうか。

そういえば綾って、転校生だもんな。すっかり忘れていたが。

まだ転校して3日と経ってないんだから、場所がわからないのも頷ける。

それなのに、さっきの俺、綾が悪いと決めつけて……

「そうか。それなら仕方ないな。俺が悪いし……ゴメン」

俺は真面目に綾に謝る。

「ううん。大丈夫！ わかってくれれば、それでいいから」

綾はそんな俺の謝罪を笑って許してくれた。

「綾は、寛大な心の持ち主ですから」

「自分で言うなし」

綾が付けたしてそう言ったのに、俺はすかさずツツコミを入れる。そして俺らは同時に笑い出した。

「それじゃあ、またあとでな」

「はい」「おう」

俺は、中澤とついでに真吾に別れを告げ、背中を向けた。

ショッピングモールに着いた俺らは、中澤が効率が悪いから二手に分かれようと言い出したため、二つのグループに分かれた。

真吾がどうしても中澤と同じがいいと言うので、真吾と中澤を同じグループにしてあげたのだが。

真吾のやつ、そんなに中澤が好きなのか？

「大海。ぼうつとしてないで行くよ」

「ん」

必然的に、栞と綾と同じグループになった俺は栞に声を掛けられ、中澤に渡されたメモに目を通す。

「大海くん。綾たちは何買うの？」

「ええーと、まずは、テーブルクロスだな」

「じゃあ、行こうか」

いや、ちよっと待てよ。

テーブルクロス7枚って、書いてあるけど、予算大丈夫なのか？
……大丈夫なんだろうな。何せ、あの中澤が書いたメモなのだ。そんなミスするはずもない。

余計なことは考えずに、とりあえずメモに書いてあるものをさっさと買っちゃおう。

俺らは、日用家具売り場へと歩を進めた。

全ての買い出しが終わり、中澤らと合流して外に出ると、既に太陽がオレンジ色の光彩を放ちながら、西に沈みかけていた。

「意外と時間食っちゃったな」

「とりあえず、学校に戻って荷物だけ置きにいこう」

栞の言葉に皆が頷き、文化祭準備期間一日目は、幕を下ろしたのだった。

ま、明日頑張ればいいよな？

その甘い考えが自分の身を滅ぼすことになるとは、この時の俺は知らなかった。

第3章 文化祭（4）

俺は既に汗だくになっていた。

動いていた方が風が当たって涼しいんじゃないだろうか、などと世迷い言さえ思ふような状況だった。

ワイシャツの下に着ているランニングシャツが汗で湿り気を帯びている。

朝の8時から始まった文化祭準備。

今は11時弱。

そうか、もう3時間も働いてたんだな、俺たちは。

ああ。確かに文化祭準備期間は今日と明日の2日しかない。明後日はもう文化祭だ。

だから、今日頑張ろうと決心していた。決心していたが、その決心は既に揺らいでいた。

今すぐにでも休憩を全身が欲している。

手の指は大分感覚が切れかけ、腕の筋肉も悲鳴を上げ、足も棒になる三秒前、倒れないために腹筋で踏ん張り、背筋も伸ばしっ放しというような状態。

そう。俺は全身が痛みで追われていた。

「や、やっとな着いた……」

俺は机を一階の薄暗い倉庫の中に置く。倉庫の中には既に教卓と本棚、そして俺が今運び入れたのとは別の机が置かれていた。

そう。

俺ら男子は、教室に置いてある物を片っ端からここに運び出しているのだ。

それを聞いただけでは、別にそこまで苦ではないと思うだろう。

だが、俺らの学校は中高一貫校であり、俺らのクラスは4階の階段から一番離れた所に位置する教室である。そして、倉庫は1階の一

番階段から離れた所に位置する。

机を持ちながら階段を下るのって、意外と辛いんだこれが。

俺は倉庫から出て、再び4階にある教室を目指す。

ああ。もつと、ちゃんと運動しとけばよかった。

階段をゆっくり上りながら、俺は今までロクな運動をしてこなかった自分を恨む。

「狩野ー」

階段を上っている途中、クラスメイトの男子が机を運びながら階段を下ってきた。

「おお。頑張れよー」

「お前も頑張るんだよ！ てかさ、お前から中澤に休憩頼むように言ってくれよ」

言い忘れていたが、俺のクラスは中澤を中心に文化祭準備を行っている。

何故中澤かというと、綾の推薦である。まあ確かに中澤なら中心になって、ちゃんとやってくれるだろうと俺を含めてクラス全員がそれを承認したのだが……

ご覧の通り、中澤は相当のスパルタであり、中澤を中心とすることに軽い気持ちで承認した自分を恨めしく思い後悔したのだった。

「何で俺が」

「だってお前ら、いつも一緒にいるじゃん。仲良いんだろ？」

「別にそこまでは……」

「ああー、じゃあ言い方を変えよう。少なくとも、クラスの男子の仲では一番中澤と接している。うん。絶対に。だから、よろしく頼んだぞー」

「あ、おい！」

クラスメイトは、好きなだけ言い残すだけ言い残して階段を足早に去って行った。

何で俺が……

理不尽さを感じながらも、俺は中澤に休憩を頼むことにした。

決してクラスメイトに言われたからではない。

俺が休憩したいからだ。

教室に着き、中澤にその旨を伝えると中澤は案外あっさり休憩を取ってくれた。

「ふううー」

俺は、教室の床に座り込む。

教室には、まだいくつか机が残っており、周りを見渡すと、窓ガラスはピンクと白と水色のペーパーフラワーで縁取られ、黒板はこれまたカラフルな折り紙のリングで装われていた。

教室の装飾は女子が担当しているが、女子も女子でちゃんとやっているらしい。

「大海くんお疲れ様ー」

座り込んで教室を観察していると、綾が俺の目の前で屈みこんだ。

「ホント疲れた……」

「あはは。だよね。見るからに辛そうだもん」

「ま、お前らもお前らでちゃんとやってるっぽいからな。皆が一生懸命やってんだったら、俺も手を抜く訳にはいかないし———！」
俺は、視線がある一カ所に釘付けになった。

綾が屈みこんでいるせいで、綾のスカートの中の、つまり、桃色のあれが見えてしまっているわけで……

視線を逸らそうにも、これも男の性さがだろうか。目を離せない。

「大海くん？」

「えと、綾。見えてる」

「え？ ……きゃあっ」

最初は言ってることの主語がわからずに、首を傾げていた綾だが、すぐにその意味する所を悟り、立ち上がってスカートを両手で押さえた。

「大海くんのエッチ……」

「悪い」

「ううー。心が籠ってないよ」

「だって、見せる方も悪いし」

「それは、そうかもしれないけど……でも、男の子なら黙って見て見ぬフリするのが礼儀だよ」

逆に黙って見て見ぬフリする方が変態ではないだろうか。

「それとも……大海くんは、綾の見たいの？」

綾の爆弾発言に俺は咄嗟に綾の頭をゴツンとグーと叩いてしまった。

「い、痛いよ大海くん」

「バカ野郎！ 何てこと言ってるんだお前は」

「大海くん、顔赤いよ？」

「う、うるせえ！ お前が馬鹿なこと言うからだ！」

俺は言い訳だけ言い残し、残り休憩時間をトイレへと逃げ込んで過
ごす羽目となったのだった。

くそ。綾に主導権握られたみたいで、何か悔しい……

第3章 文化祭（4）（後書き）

何か、下ネタ多くてすいませんorz

第3章 文化祭(5) (前書き)

新学期が始まってしまいました……
更新ペース遅くなるかもです。。。

第3章 文化祭（5）

休憩が終了し、俺らは再びそれぞれの仕事に就いた。

机を教室から倉庫へ運び出しては、また教室に戻るというエンドレスループ。

エンドレスじゃなくて、終わりはやって来るのだろうけど、そんな気が全くなかった。

だが、現実俺の気とは裏腹に教室には机が一つもなくなっていた。その意味する所はつまり――

「終わったー！ー！！」

俺が教室で雄叫びを上げると、周りの男子も「よっしゃあー！」「いえー！ーい！！」「うおおー！ー！！」と、一人一人が雄叫びを上げ出す。

そして、どちらからともなく、俺たちはハイタッチして、地獄の肉体労働から脱出したことを喜びあった。

「大海様」

「おお中澤。机運び終わったぞ」

俺は誇らし気に胸を張る。

「はい。では次は、テーブルを運び入れてください」

ピキーン。

男子の空気が一変。凍りついたように静かになった。

あれ？ 何だろう？ 今幻聴が聞こえた気がしたんだが。

「ですから、グラウンドに止めてあるトラックの中に、白いテーブルが七つあるので、二人一組で全て教室に持ってきてください」

サアアーツと血が頭から引いていくのを感じた。

「な、中澤。つまり、俺らはまた机を運ばなきゃいけないのか？」

俺は認めたくない事実を中澤に確認する。

「机ではなくてテーブルですが。そう言ったつもりです……少しわかりにくかったみたいですね。テーブルというのは、私達が別に買

ってきたものです。教室の机だと、どうしても地味になってしまうので。今、元々あった机を運び出して頂いたので、やっと白いテーブルを運び入れることが可能となりました。ですから、大海様たちにそのテーブルを運んで来てほしいのです。お理解いただけましたか？」

お理解いただけません。というか、したくありません。
泣きますよ、マジで。

しかもグランドって……倉庫よりも遠いし！

「大海様。あともう一踏ん張りです。これが終わればもう男子は休んでくださって、結構ですので。あ、大海様は文化祭実行委員の仕事がありましたね。申し訳ございません」
すいません。ホントに泣いていいですか？ 目頭が熱くなってきたんですが。

「お願いします。大海様……」

中澤が俺に頭を下げてお辞儀した。
はあ。

確かに、俺は相当体力を消耗しており、本心はもう動きたくない。
だがしかし。

女の子にここまでさせておいて、やらない男なんて男じゃないよな……

「わかった。もう一踏ん張りすっか」

泣きたい気持ちをギリギリで抑えて、男のプライドを保つために、俺は右腕をブンブン振り回して、中澤にまだまだやれますよ的なことを伝える。

泣き言言うのは、まだ早すぎるよな。
よし。頑張ろう！

「ありがとうございます」

中澤のお礼を背後に、俺は自分を叱咤しながらグランドへと向かうために階段を小走りで下った。

「お、終わったー!!」

白いテーブルは意外と重かったが、数が7つしか無かったため30分もしないで運び終えた。

まさに、もう一踏ん張りだったのである。

「大海様、お疲れ様でした。今日は終わりで良いですよ。ゆっくり休んでください」

「いいのか？」

と言っても、もう働く力は残ってないのだが。

「はい。あとは、女子の仕事です」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

俺は教室の床にへたり込む。

「30分後に文化祭実行委員の人は、校門でまた仕事があるみたいです」

「……」

中澤の言葉は聞かなかったことにした。

そんな感じに、文化祭準備二日目は幕を閉じた。

え？ 文化祭実行委員の仕事？

もちろん行きましたよ、ええ。聞こえなかったことにしたかったけど、俺は真面目だからな。行かないわけにはいかない。

どんな仕事かって？

勿論、肉体労働です。

あははははは。

夜、家に着いてから栞に背中に湿布を貼ってもらいマッサージをしてもらった。

綾もやりたがったが、俺が断じて許さなかった。綾にやらせたら、余計に筋肉痛が酷くなりそうだからな。

……まあ呆もそんなに上手くはなかったんだが。

それでも「こんなことで筋肉痛なんて、大海情けない」とぐちぐち言いつつも、頑張ってくれてたからいい。

綾はと言うと、マッサージをさせてもらえなかったからか、ふて寝をしていた。

何故か、俺のふくらはぎを枕にして。

俺は足をさっと引き、ゴンツと鈍い音が響いたのと同時に聞こえてきた悲鳴を聞き流し、おやすみと告げ自分の部屋へと引き帰った。

夜。綾が俺の部屋に侵入して、俺の腹にエルボーをかましたのは、別の話である。

幸いというべきか、俺は寝ぼけていたため、綾からエルボーを喰らったことは全く覚えていない。

第3章 文化祭（5）（後書き）

お気に入り登録が増えて、嬉しいです（＜――＞）
感想、指摘など細かいことでもいいので、書いていただけると凄く
嬉しいです！！

第3章 文化祭（6）

文化祭準備三日目は、二日目の頑張りもあり、切羽詰まった様子もなくゆったりと皆働いている。

なんて、そんな現実とは、幻想だった。

俺もまだまだ甘いつてことだな、うん。

俺ら男子は、椅子の運び出しをしていた。

そうだよな。テーブルだけじゃ、成り立たないもんな。わかってたさ、それくらい。

ただ、現実逃避してただけ。

「椅子は一つのテーブルに三つお願いします」

中澤の指示が教室に響き渡る。

一つのテーブルに三つってことは、3×7で21。

このクラスは男子が10人だから、1人だけ三回往復しなければならぬのか。先程、男子全員が二往復を終えた。

あと一つの椅子を運べば、俺らの肉体労働は終了。

そんな状況下で、俺らは集まって火花を散らしあっていた。

理由はただ一つ。

誰がもう一往復行くのか。

「どうする？」

「誰か、行きたいっていう、ドMはいないの？」
いるわけない。

「じゃあどうすんだよ」

「あと、1人だろ？」

「お前行けよ。今回テスト、ワーストワンだっただろ」

「はあ？ 関係ねえだろ。だったら、オンリーワンのお前が行けよ」

「ナンバーワンな」

「う、うるせえ!」

「あのなあ、今はテストなんか関係ねえだろ」

「だったら、てめえが行け」

「は? ふざけんな」

話し合いでは決まりそうになかった。そんな時の最終手段と言ったら、アレしかない。

「もう、埒あかねえ。こうなったら、じゃんけんだ」

そう。最も単純明快な勝負であり、最凶の心理戦と言われるゲーム。だが、俺は心理戦とは思わない。

「俺グー出すから」

「ふっふっふ。見えた!」

「ふぬぬぬぬぬ」

自分の出す手をワザとさらけ出す者。両手を高く上げて交錯させ、その隙間を覗いて見えたとかほざく者。ひたすら、自分の右拳に念を送っている者……

色々な奴がいるが、俺は絶対に勝つ自信があった。

「行くぞ」

全員が円になり、中心を睨む。

「最初は、グー!」

俺は神経を研ぎ澄ます。

「ジャンケン!」

全員が腕を振り上げる。その景色がスローモーションに見える。

「ポン!!」

そして、隣の奴が出した手を見てからそれに勝てる手を出した。

俺は、目が異常に良い。普段なら有り得ないが、神経を研ぎ澄ました時だけ、俺の目は異常に良くなる。

何故かはわからない。だが、このことは朧も知らない、はず。

何せ記憶が無いのだ。その思い出せぬ記憶の内に俺が朧に話してし

まっている可能性はあるが。
少なくとも、俺の記憶の範疇には、栞に教えた覚えはない。
最初のジャンケンはいいこ。

俺は隣の奴の手に勝てる手を、相手が気づかない位のズレを使って
後出しすれば良い。

ジャンケンの結果、ナンバーワンの男が行くことになった。

「ふう」

俺は短く溜息をつく。

この能力は相当神経を使うため、長時間は続けられない。かなり疲
れるからな。

「なあ、大海」

「ん？」

真吾が怪訝な表情で俺を見ている。

その真吾の見たこともない真面目な雰囲気、俺は軽く身震いした。

「お前、今のジャンケン――」

「？」

「いや、何でもねえ」

「はあ？」

「はっは。悪い。気のせいだわ」

真吾は、表情をぐにやりと崩し、いつものへらへら顔に戻った。

真吾はその後、中澤にちよっかいを出しに行った。

存在自体を最早無視されていたが。

時計をみれば、もう昼の1時を回っていた。

「中澤」

「はい……ああ、もうこんな時間ですね。お昼にしましょうか」

中澤の休憩を知らせる発言に、教室が安堵の溜息で包まれる。

それから一時間の休憩のちの後。

今度こそゆったりとした空気で続きが再開され、文化祭準備最終日
は終わりを告げた。

第3章 文化祭(6) (後書き)

次回、やっと文化祭本番です！

第3章 文化祭(7) (前書き)

すいません。

まだ文化祭本番ではありませんでした
(21;)
前日の夜です!

第3章 文化祭（7）

「ふぁーあ」

俺は自分の部屋に入り、大きな欠伸を吹かす。

明日はついに文化祭本番か……

何だか、そんな実感が全く湧かない。

思えば、こんなに文化祭準備で疲れたことなんかなかった。それも、綾と中澤が来てからだな。綾は俺にとって問題児なのは言うまでもないが、中澤も意外とある意味問題児なのかもしれない。

さりげなく無理難題を吹っかけてくるからな。しかも、断れないという、性質^{たち}の悪いもの。

でも、その無理だと思っていたことを結局俺らは、やってのけてしまったわけで。

そういう面では、中澤はやはり凄い奴なのかもしれない。

問題は綾だ。

何故かはわからないが、綾は俺に好意を寄せてくれている。それくらいは、流石に恋愛に鈍感な俺でもわかる。

でも、その好意の示し方がな。ちよっとおかしいんだよな。

……すまん。訂正。

かなりおかしい。

初対面の俺にいきなり告白したりとか、いきなり抱きついてきたりとか、乙女あるまじき発言をしたりとか……

ホントにいい迷惑だ。俺が嫌がってもやめようとしなないし。

———ホントにそうか？

ふと、疑惑の念に俺は駆られる。

「はは」

俺はつい笑ってしまっていた。

余りにも素直ではない自分に対して。

迷惑？ 嫌がってもやめない？

確かにそうだ。綾には、色々迷惑かけられてる。
だがな。

俺は、迷惑かけられても、満更でもないように思ってたんだろ？ 表
向きは嫌がって、裏では大して嫌がってないんだろ？

……ああ。そうかもな。

俺は今までの綾との接触を振り返る。

確かに、俺はそういう全てのことを引っくるめて楽しいと感じてい
る。

現に今だって、つついにやけている俺がいるんだ。

「はははは」

俺は一人、天井を仰ぎ声に出して笑う。

「大海くん。不気味だよ……」

「ブホッ！」

いつの間にか綾がドアの前に立っていた。

「なっ、あ、綾！ お前いつからそこにいたんだよ！」

危うく舌を噛んでしまいそうになった。

こいつ、ホントにいつの間に入ったんだ？ 全く気付かなかった。

「うーん。大海くんがニヤニヤしたあたりから？」

やべえ結構前からだ。

「それでさー、大海くん何で笑ってたの？」

「思い出し笑いだよ」

「……」

「何だよその『うわー、この人凄くイタァイ』的な表情は！」

「え？ 大海くんエスパー？」

「まあな」

「……」

「やめろ、その『ノリで言っただけなのに、何本気にしちゃってんのこの子』的な表情！」

バン！

突然、扉が勢いよく開けられた。そこには――――

般若と化した栞がいた。

「大海。今何時か言ってごらん」
栞の満面の笑顔。

普段は見ないレアな栞の笑顔と言うのに、全く嬉しくないのは何故だろう？　　というか、震えが止まりません。

「えと、0時を回った辺りかと」

「そうだね。世間一般で言う夜中にあたるわけなんだ」

「は、はい」

「普通、皆寝てるか寝ようとしている時間だよな？」

「はい……」

「そんな時間に大声で叫んだりする、傍若無人な大馬鹿がいたら、どう思う？」

「……ごめんなさい」

「え？　いや、あのね。今私は、大海に質問してるの。ごめんなさいは、その答えになってないよね？」

「め、迷惑だと思います」

「うん。そうだよな。というわけで、黙ってさっさと寝ろ」

こくこく頷く俺を見て、栞は俺の部屋から出ていった。

「ふううー」

俺は今この瞬間、生きていることに感謝した。

はぁ。馬鹿した。綾に気を取られ過ぎていた。

栞は、普段もキレると怖いが、眠りの妨げをされると、尋常じゃない程にブチギレる。

「お前のせいだぞ綾」

俺は小声でベッド脇に隠れていた綾に文句を垂らす。

「大海くんが、叫ぶのが悪いんじゃない」

「お前が来なければ、こんなことにはならなかった」

「大海くん、ちょっとしたことですぐ怒るんだもん」

——お前のちょっとしたことは、ちょっとしてねえんだよ！と、叫びたい気持ちを俺は何とか堪える。

ダメだ。これ以上、綾と一緒にいたらまた栞の逆鱗に触れる可能性がある。

「まあ、いいや。お前もさっさと自分の部屋戻って寝ろ」

「ううー。仕方ないな」

綾が偉そうにしているので少し苛ついたが、我慢だ我慢。

「大海くん」

ドアを半開きにしたところで、綾は顔だけこちらに振り返る。

「明日、頑張ろうね」

穏やかな口調で綾が俺を鼓舞する。

「あ、ああ」

俺の返事を聞いて、満足そうに綾は「おやすみ」と言い残し部屋から出て行った。

今の綾の一言で、俺の中の苛立ちは消えていた。

俺って、単純だなあ。

そんな自分に苦笑する。

綾は、もしかしたら、それだけを言うために俺の部屋に来たのかもしれない。

それなのに俺が色々ツツこんだりするから、綾も負けじと反抗しちゃうのかもな。

少し反省。

まあでも。

楽しいからツツコミを入れるのはやめないがな。

俺は笑いを噛み殺し、部屋の電気を消して眠りについた。

明日……じゃなくて、もう今日か。

文化祭、成功するといいな。

第3章 文化祭（7）（後書き）

次回こそは、文化祭本番に入ります！

第3章 文化祭(8) (前書き)

遅れてすみません(；一一一)

第3章 文化祭（8）

カーテンの間から射し込む光が眩しい。今日も暑くなりそうだ。

とは思っていたけど、ホントに暑いな。

俺は今、いつものメンバーと学校までの道程を歩いている。

ちなみに、朝綾が俺の部屋に侵入してくるのは、もうあきらめた。普通に綾に起こされるのが日課になっている。

「ついに、やってきたな」

「そうだね」

栞がいつも通り素っ気なく返す。

だが、内心何だか嬉しそうだ。頬が少し緩んでいる。

「文化祭〴〵。文化祭〴〵」

綾は一人で夢見心地だ。俺らの先頭をスキップしながら鼻歌を奏でている。

どんだけ、楽しみなんだよ。でも、悪い気はしないな。

俺だって、楽しみなんだから。

「そういえば、俺らってメイド喫茶なんだろう？ メイド服とかあんの？」

真吾がメイドにアクセントを置いて、女子三人に尋ねる。

真吾の言葉に栞がカチーンと固まる。

「うん。瑞樹が用意してくれたんだよね」

「はい」

どうやって用意したんだ、そんなもん。しかも、予算増額の申請来てないってことは、予算を増やしてないということ。

よく足りたな。いや、足りるわけない。

何かしらコネでも使ったのだろうか？

……やめよう。

中澤の考えてることが、俺なんかにわかるわけない。

「中澤さん。ホントにアレ着るの？」

栞がワナワナ震えている。

「はい。そうしないと、メイド喫茶にはならないかと」

中澤が怪訝そうに、さも当たり前かの如くピシッと言い放つ。

「どうしたんだ、栞？」

「大海。お願い」

「は？」

「私の姿、視界に捕らえないでね」

栞が俺に懇願する。

「何で？」

「いいから、とにかく見ないで！」

栞は、プイとそっぽを向き少し早歩きで学校への道を急いだ。

栞のやつ、そんなにメイド服姿を見られたくないのか？

……まあ普通は見られたくないわな。それが普通の女子の反応だよな。何だか最近、俺の普通が普通じゃないような気にさせるようなことばかりあったから、俺の常識がややぐらついている。

でも、栞のメイド姿、見てみたいな。

俺は密かに、栞のメイド姿をこの瞳に収めることを決意した。

「文化祭〜。文化祭〜」

こいつは、いつまでこのテンションが保ち続けられるのだろうか？

「……なあ大海」

「ああ、お前の言いたいことはわかった。が、俺も言いたい」

「お前が？ 珍しいな」

俺と真吾、その他男子諸々は、只今普段勉強している教室とは思えないほどに装飾された教室で待機していた。

文化祭開催まで、残り二十分を切っている。

間に合うのか、あいつら？

教室にて暇を持て余しているのは、男子のみ。
つまるところ、それは女子待ちだということ。

「遅いなあいつら」

俺の率直な感想に、真吾がわざとらしくずっこける。

「言いたいことって、それかよ！」

「え？ 違うのか？」

「違いよ！ お前らはわかってるよな？」

真吾が俺以外の男共に確認をとる。

「……」

男共は、それにビシッと揃って親指を立てた。

うわ。キモッ、こいつら。

俺は真吾と距離を取ろうとした。

「お待たせー」

その時。ドアが開かれて、綾が現れた。

———メイド姿で。

「おおお」

観客席（男子が居座っている場所）から、歓声が上がる。綾につられて、他の女子もゾロゾロと教室に入ってくる。

そして、最後尾には———

中澤の影に隠れるようにして、嫌々入ってきた栞の姿があった。

こ、これは……可愛いな。

俺は、綾や栞を始めとする女子のメイド姿について見惚れていた。

メイド服は、ホントに典型的なメイド服という感じの物だった。

全体的に白と黒で形成されていて、胸元のリボンはピンク。肩には白いヒラヒラしたものが付き、腕の部分は黒。胸からお腹にかけては白で、お腹から背中にかけて、大きな白いリボンでキュッと結ばれている。スカートはエプロンのような物がスカートの上に掛かっており、スカート自体は黒。スカートの最端には白い半円形のこれまたヒラヒラがついている。

中澤だから、もしやと思ったが。これ、本当にメイド服じゃないか。

「大海くん！」

「おう。綾か」

「どうかな？ この服？」

綾が期待に満ち溢れたキラキラした目で俺に感想を持ちかける。

「ああ。可愛いと思うぞ」

「ホントに？ さすがは、瑞希だね」

綾が嬉しそうに、メイド服のスカートの裾を摘まんで、くるっと一回転する。

「ああ。中澤はホントに凄いな」

「えへへ」

中澤を褒めたのに、何故にお前が照れるんだよ。

ツツこもうかと思ったが、不覚にも綾のメイド姿にドキッとしてしまった自分があるわけ。

仕方あるまい。今回は負けを認めよう。

よくわからない自己完結をした挙句、俺は綾に「頑張ろうな」とだけ言い、文化祭が始まるまでの

カウントダウンに身構えたのだった。

第3章 文化祭(8) (後書き)

あれ？ まだ文化祭始まってない……
ホントにすいませんm(´`´)m

第3章 文化祭（9）

「まもなく文化祭開催です。それでは、カウントダウン、スタート！」

放送委員の掛け声と共に、文化祭開催まで、残すところ10秒となった。

「10！」

教室で全員がカウントする。

「9！」

思えば、ホントに疲れたな。

「8！」

だが、ようやくここまでこれた。

「7！」

充実してれば一日なんてあっという間だと言えけれど。

「6！」

それは、ホントかもしれない。

「5！」

だって————

「4！」

綾たちがきてからの日々は。

「3！」

退屈なんて全くしなかったから。

「2！」

「綾」「ん？」「……ありがとな」

「1！」

「何言ってるの大海くん」

「0！！！」

「これから、始まるんでしょ」

綾は、ふふんと勝気に言う。

「ああ、そうだな」

カウントダウン終了と共に。

文化祭が幕を上げた。

啞然。

まさに口をポカーンと開けて、今のこの状況に啞然としていた。

「大海ー！ サボるな！」

「はいはい！」

栞に怒鳴られて、俺は栞が執ってきた注文のメモを受け取る。

文化祭が始まってから三十分。

俺らのクラスは、溜息をつく間もなかった。

余りにも客が多すぎて、嬉しいんだが、嬉しくなかったのだ。

この高校の文化祭は、初日から一般公開される。中学生は、文化祭準備に入った日から休日となっていて、今日も中学生は来たい奴は来ればいいという感じだ。

と、そんなのどうでもいい。

「大海くん、注文！」

「はいよ」

「狩野ー、注文」

「はいー」

「大海。注文」「狩野くん、注文です」

「はいはい！」

やばい。忙しすぎる。

俺の役割は、メイド姿で注文を取って来た女子から、メモを受け取り、調理する人らに伝える役割。

その注文が、人が多すぎて絶えず続いているのだから、これは辛い。

「お一人様、団体の方は一組様、15分までとなっております！
ご了承ください！」

はは。制限時間設ける喫茶店なんか初めて見た。

でも、仕方ないんだよな。

だって、何故かわからないけど、廊下に長蛇の列が出来てるのだから。

まあ、こういうのを嬉しい悲鳴って言うんだろうな。

俺はカウンターから教室の様子を眺める。

「いらっしやいませ！ ご注文をどうぞ！」

綾はニコニコの笑顔を全く崩さない。こいつの元気さは、こういう場面では功を奏しているようだ。

ある意味、綾の天職かもしれないな。

「あの子、めっちゃ好みなんだけど」

「マジかわいいよな」

「お前、話しかけてみるよ」

「おっけ。すいませーん！」

綾は、やはり一番人気があるみたいだな。でも……

何だか嫌だな。綾が俺の知らない奴に愛想振る舞うなんて。

って、バカか俺は。

それが綾の仕事なんじゃねえか。

ん？ 俺、今嫉妬してたのか？

……俺が？ 綾に？

いやいや。有り得ない有り得ない。

「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ」

栞はあくまでポーカーフェイスを崩さず、マニュアル通りの対応を

している。

いいのか、あれは？ お客さん、軽く怖がってる人もいるし。

「おお。クーデレだ」

「天性のクーデレを初めて見たわー」

まあ、これはこれでウケているからいいか。

「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ」

中澤は、客が嫌味だと思われない程度に微笑みを覗かせながら、丁寧な対応をしている。

というか、中澤は言うまでもなかったな。

というわけで、要約すると。

完璧だった。

他の女子も皆それなりに頑張っている。

つかえつつかえだったり、おどおどしながら注文を承ったり、慣れない敬語の使い方を間違えて客に苦笑されたり……

そんな、完璧な喫茶店には程遠い俺らの喫茶店は、逆にそれが初々しくて良いのかもしれないな。

「ひーろーみー！！」

「はいはい！」

栞に激怒され、俺は慌てて仕事に戻った。

第3章 文化祭（10）

短い休憩を終えた後、俺は再び仕事場に戻った。時計を確認すると、昼の1時を回っている。

客足は大分落ち着いたが、忙しいことに変わりはないさそうだ。

「お、狩野か。じゃ、俺休憩入るわ」

「ああ。お疲れ」

俺が仕事に入ると同時にクラスメイトの男子が休憩に入る。

さて。やるか。

「や、ちよつと！」

仕事モードに入ろうと気合を入れた時。教室に悲鳴が響いた。

見れば、客席の方で女子と、どっかの高校生だろうか？ 若い男が

女子の腕を掴んでいる。

って、あれ栞じゃねえか！

「離して……ください」

栞は、クールな表情を崩さないようにと努めているが、裏側では相当嫌がっているのだろう。

栞はあくまで、もてなす側だから客に暴力を振るってはいけないと思っているんだろうが。

今すぐにでも殴りたい所だが、それだと栞が必死に言葉だけで解放されるように努力してるのを無下に扱うことになる。

くそ。

俺は拳をプルプル震わせながら、必死に煮えくり返っている心を止める。

「固いこと言うなよ」

「いやっ」

それでも、穏便に済ませようとする栞の心を踏み躪るかのように、

若い男二人は葉の尻に腕を伸ばした。

「あいつら——！」

瞬間。

俺の中で何かがキレた。

流石に客といえど、もう許さねえ！

俺はその腐れ野郎達のところに足を向ける。

「おい、てめえらしい加減にしろ」

が、俺が飛び出す手前、綾が先に男二人に罵声を浴びせた。

「何だよ？」

男は自分達の邪魔をしてきた綾に明らかな嫌悪を向ける。

「へえ。君もかわいいじゃん」

しかしそれも束の間。

男は綾の容姿を見ると、君悪い笑みを浮かべた。

「黙れ、腐れ外道野郎。てめえらみたいな奴、迷惑なんだよ。わかんないの？」

「あん？」

男は綾の罵詈雑言に、流石に苛ついたのか立ち上がって綾を見下す。

「可愛いからって調子のんなよ」

男は綾の胸ぐらを掴んだ。

まずい。流石にこれは止めな————

ヒュッ。

「え？」

一瞬、何が起きたかわからなかった。

気づいたら、男が空中に舞い上がり半回転していた。

ドスン。

「ガッ」

そのまま、男が悲鳴を上げて、重力に逆らうまでもなく、地面に叩きつけられる。

「な、こいつ……」

男の連れが驚愕の目で綾を見ている。現に俺もそうだ。今の、綾がやったんだよね……？

綾は男を見下ろし、一言。

「出てけ」

ゾクッ。

その一言に、俺は恐慌から来る寒気を覚えた。

まただ。

また、この圧迫感。

間違いなく、文化祭実行委員を決めた時と同じ、この感じ。

「お、おい行くぞ」

連れの男は、地面でひれ伏している男の肩を担いで慌てて教室から出て行った。

「あ、綾」

俺は恐る恐る綾に声を掛ける。

「全く、あんな人達いるんだねー」

綾は頬をぷくーっと膨らませていた。

先程の圧迫感は、またもいつの間にか消えている。

その途端、客席の方から拍手音が聞こえた。拍手の音は次第に大きさを増す。

「すっげえー」「いいぞー嬢ちゃん」「かっこいいー」「ビューヒューー」

客から思わぬもてなしをされた綾は「いえいえ、それほどでもー」と典型的な照れ方をしていた。

綾……

こうしていれば、変な奴とかは置いておいて、ただの女子高生にかみえない。

しかし、時折覗かせる裏の姿を持っている。

「大海くん、どうかした？」

「いや、大丈夫だ」

そうだな。

今は文化祭に専念しよう。

綾に聞くのは文化祭が終わってからだ。
俺は密かに決心し、再び仕事に戻った。

「広瀬さん」

先程の騒ぎが大分落ち着いた頃。

栞が綾呼んだ。

「その、ええーと……あ、ありがとう」

栞が横髪を掬いながらお礼を言う。

「ううん。気にしないでいいよ」

そんな不器用すぎる栞に、俺はつい笑ってしまった。

「大海、何笑ってんの」

「別に」

俺はニヤニヤをやめない。

「は、早く仕事戻りなよ」

栞はコホンとワザとらしく咳払いして、バツが悪そうに他の客のオーダーをとりに行った。

あれ？　そういえば、栞と綾が話してるところ余り見かけないよな。

「綾」

「んー？」

「綾って、栞と仲悪いのか？」

「え？　そんなこと全然ないけど？」

「そうか」

「何でー？」

「いや、違うならいいんだ」

ま、気のせいかな。

俺が深入りする必要もないしな。

「いらっしゃいませー！ ご注文をどうぞ」

綾は早くも切り替えて仕事を始めている。

「はい、大海くん。注文だよ」

「おう」

また、忙しくなりそうだな。

その後も客足が途絶えることはなく、文化祭一日目は、大盛況のまま終わりを告げた。

第3章 文化祭（11）

朝目が覚めて、真っ先に思い浮かんだのは筋肉痛やバイということだった。

それでも、今はそんなの気にしてられない。

「大海くん、おはよー」

「おはよ」

「今日も頑張ろうね！」

綾が俺に向かって拳を向ける。

「そうだな」

俺は綾の拳に自分の拳をコツンとぶつけた。

今日も一日がまた始まる。

文化祭二日目は、初日と同じように一般公開される。

だが、公開される時間が違っており、昨日は12時～17時だったが、今日は9時～15時。

幸いにも、俺は昨日ほとんど働いていたため、今日は9時～10時まで働いたら、残りは全て自由時間だ。

そう思うと、俄然仕事をやる気が増してくる。

今日は、流石に昨日と同じまでとはいかないものの、大盛況に変わりはしないだろう。二日目が始まってからまだ十分と経たない内に、客席は既にほぼ満席となっていた。

「申し訳ございません。当店では、パスタなどの主食となり得るものは扱っておりませんので」

と、客席の方でまた何かもめていた。

「は？ ないのかよ」

「本当に申し訳ございません」

見れば、中澤がガラの悪そうな男にいちやもんを付けられていた。俺らのクラスが経営するこのメイド喫茶の欠点はメニューが少なすぎるからだ。

何せ、「コーヒー（ホットorアイス）」「紅茶（ホットorアイス）」「果実系ジュース」「炭酸飲料全般」「ハニートースト」しかない。

正直な話、ここは文化祭に疲れて休憩したい人のための喫茶店であり、ファミレスとは違う。

それでも、こんなに人気なのは、単にメイド姿の女子が可愛いからだろう。または、興味本位で来たとか。

興味本位で来る人は、既に昨日来てしまっているから、今日は来ないだろうな。その分、多少は空^すいてるし。

ただ、気になるのは——ニューフェイスが少ない。

要は、昨日来た人と同じ人ばかり来ているということだ。

……まあ、いいか。客が多いに越したことはない。

俺は仕事に集中することにした。

「大海様。10時になりました故、休憩なさってくださいですよ」

中澤の許可が出て、待ちに待った自由時間がやっと来た。

「おお、サンキュー」

俺は教室を出て、グーッと伸びをする。

「さて。どっか回ろうかな」

「大海くん！」

独り言を呟くと、タイミングよく後ろから名前を呼ばれ、俺は背中に抱きつかれた。

その一連の動作に嬉々している自分が何だか悔しい。
でも——

「綾も自由時間か？」

俺は綾をひっぺ剥がして綾に聞く。普通の制服姿に戻っているということは、おそらくそうなのだろうが。

「うん！ 大海くんもでしょ？」

「ああ。今日は残り時間はずっと自由だ」

「ホント？ 私もそうなんだよね」

……シフトを組んだのは中澤である。

あいつ、謀ったな。

「どうかしたの？」

「いや、何でもない」

ま、悪い気など微塵も感じないんだけど。

「じゃあさ、一緒に回ろうよ」

「だが断る！」

「即答！？ しかも拒否だし！」

「だって、綾と一緒にいたら体力保たなそうだし」

「ううー。そんなに体力バカじゃないよ私はー！」

「そうか？ 昨日からずっとそのテンションを保ち続けてるんだから、かなり体力あるだろう」

「……大海くんのバカ」

「ああ、冗談だ。冗談だから良い年した女子高生が泣くな涙目になった綾を見て、俺はすぐ様綾を宥めにかかる。」

「女子高生は良い年してない」

「ちゃんとツツコミはするんだな……」

綾は俺の言ったことが冗談だとわかると、途端に頬を膨らませ始めた。

「悪かったって」

「フーンだ」

「綾」

「フーンだ」

「はあ……何か奢ってやるから、機嫌直せよ」

「ホントに！？ 私、りんご飴食べたい！」

何て現金な奴なんだこいつは……しかも切り替え早っ。

「はいはい。何でも一個だけなら奢ってやるから」

「やった！ そうと決まれば、大海くん。早く行こう！」

「わっ！ あ、綾！」

綾は俺の手を掴んで急に走り出した。

「綾！ 時間はあるんだから、そんなに急がんでもいいだろう？」

「甘いよ大海くん！ 楽しい時間なんて、あっという間に過ぎちゃうんだから！」

はあ。

仕方ない。今の綾に何を言っても無駄だな。

俺はおとなしく、綾に引っ張られるがままになった。

あれ？

突然、何とも言えない違和感が俺を襲った。

何だろう、この感じ……

綾の背中を追いかける俺。綾に引っ張られている俺。それでも、嫌ではないと思っている俺。

こんな状況、前にも——？

俺は今の状況に、既視感デジャヴを感じていた。

「大海くん！ もっと早く！」

「わかったから、そんなに引っ張るなバカ！」

「アハハ！」

何で、こいつはこんなに楽しそうなのだろう？

「ははっ」

俺だって楽しいくせに何言ってるんだか。

先程の既視感^{デジャビュ}は当に消えていた。

第3章 文化祭(11) (後書き)

これからは、3日に一回というペースになりそうです。。。

第3章 文化祭（12）

「ホラ、りんご飴だ」

「うわー！ありがとうございます大海くん！」

俺は中庭のベンチに座っている綾にりんご飴を渡す。

グラウンドと校舎の間にある中庭に、綾が求めていたりんご飴を売っている屋台はあった。

まさか、りんご飴専門の屋台が高校の文化祭にあるとは思わなかったよ。

「あれ、大海くんは？」

「俺の分までそれ買ったら、俺が金銭不足に陥るだろ」

「それもそっか。悪いねえ大海くん」

綾がニヤニヤしながら、俺の肩をポンポン叩く。

賭けてもいい。こいつ、絶対悪いなんてこれっぽっちも思ってたなどいやしない。

「仕方ないな。ほら」

「……何のつもりだ？」

綾が赤色のりんご飴を俺の口元に向けた。

「大海くんが、このままじゃ可哀想だなんて思ったから。一口あげる」

「いらねえよ」

「どうして？ おいしいよ？」

「どうしてじゃない。だって、俺がそれ食ったらお前と———！」
——間接キスすることになるだろ。

自分が言おうとしていたことがかなり恥ずかしいことに気付き、俺はすんでのところで押しとどまる。

「あれれ、大海くん。もしかして、間接キス意識しちゃってんの？」

「！……んなことねえよ」

だが、綾に言おうとしていたことを感付かれてしまい、逆に綾に俺を弄るきつかけを与えてしまった。

「大海くんも初心うぶだなあ」

「うるせえ」

綾がりんど飴を食べ終わるまで、俺は綾にひたすら弄もてあそばれていた。こいつ。絶対後で仕返ししてやる……

「うーん！ 美味しかったあ」

綾が満足気に口元を拭っている。

「良かったな」

「じゃあさ、じゃあさ、次どこいく？」

「何か他に食べたいのあんのか？」

「むー。綾、そんなに食い意地張ってないよ」

「そうかー？」

「そうだよ！」

綾をからかいながら、普段とは全く違う景色の廊下を歩く。

無機質な白だった壁は色張り紙や造花でほとんど覆われ、そこには各クラスのオリジナルティ―溢れる絵や文字が描かれていた。

床には犬の足跡があり、階段の壁にはどのクラスで何をやっているかについての広告が貼られていた。

どのクラスも必死なんだな。

予算をもらい、売上が予算を上回らないと、そのクラスは夏休みにわざわざ学校に来て、大掃除をしなければならない。

わかるだろうか。その苦しみが。

遊べる時間を学校に行かなくてはならない、その苦痛が。

……それだけは絶対に阻止しなければならない。

だが、逆に予算を越した分はクラスで内分けにしてよい。要は、お小遣いが手に入るようなものだ。それは、大変大きいメリットである。

食べ物の販売はどの学年がやってもいいことになっている。ただ、やはり食べ物が被ることもあるので、その時はどちらか一方に妥協

してもらおう他ない。

ちなみに、その辺を調べたりするのも文化祭実行委員の役目だった
りする。

俺はその方面は関わってはおらず、廊下（階段などの公共の場所の）
の装飾だったが。

もちろん、食べ物を販売しないクラスもあり、そういったクラスは
出し物関係になる。

今回で言うと、定番のお化け屋敷を始め、占い、演劇、クイズ大会、
ピタゴラスイッチの披露会などなど。

そのクラスは売り上げがどうこうする問題ではないため、初めから
掃除は免除される。その分、お小遣いも手に入らないのだが。

「大海くん、どうする？」

「あー、とりあえず昼にはまだ早いからな。時間あるし、片っ端か
ら回っていいこうぜ」

「そうだね。よし、まずは一年一組からだ！」
「おう！」

この高校はクラスが決して多い訳ではないから、全部回れるだろう。
……かなり疲れそうだが。

「大海くん、行つくよおー！」

ま、たまには綾に付きあってやるか。

俺は、綾に手を引っ張られながら一年一組の教室を目指すのだった。

第3章 文化祭（13）

一年一組は、『問題を解きながらダンジョンを進め!』という説明書きのアトラクションをやっていた。

何でも、教室に入り、受付で渡されるであろう解答用紙に次々出される問題の答えを書いていき、出口まで進んでいく形式らしい。

「全問正解されると、景品がありますので頑張ってください」

受付の女の子が眩しい笑顔で、俺に解答用紙を差し出した。

「ああ、ありがとう」

受付嬢はいつまでもニコニコしながら俺らを見送った。

愛想良い女の子だな。

そんな受付嬢に俺はついほくそ笑む。

「ひーろーみーくーん」

「な、何だよ？」

教室に入って、隣を見れば、綾がジト目で俺を睨んでいた。

「何、デレデレしてんの？」

「別にデレてなんかねえよ」

「ウソだろ。そうだよなー、さっきの女の子、可愛かったもんね」

綾が何故か自暴自棄になっている。

「いや、確かに可愛いとは思ったぞ？　だがな、それはデレるとは

違うだろ」

「ええー。そうかなあ？　邪な感情も入ってたんじゃないの？」

何でこいつは、こんなにもさっきの女の子に執着するのだろうか？

しかも、何か怒ってるし。

「何怒ってんだよ」

「怒ってない。ふて腐れてんの」

誤魔化さずに正直に今の状況を言うやつ、初めて見たわ。

「何ふて腐れてんだよ」

「ふて腐れてない。怒ってんの」
どっちだよ。

ホントに意味わからんやつだ。

「ああ、悪かったよ。機嫌直せよ綾」

はあ。何でだろう？

最近、綾がふて腐れてたり怒ったりと精神状態が芳しくない時は、すぐに綾の機嫌を取るようになってる。

綾には笑っていてほしい、と。

「綾」

「……」

はあ。

俺は再び短い溜息をつき、綾の頭にポンと掌を置いた。綾は頭に感触を感じると、驚いたようにこちらを見る。

「機嫌直せよ。な？」

俺は綾の頭をゆっくり撫でた。

綾の髪は、さらさらとしていて、何だか甘い香りがする。

「……ずるいよ大海くん」

綾は顔を火照らせて、ボソツと呟いた。

「そんなことされたら、何でも許しちゃうじゃん……」

まあ、そもそもお前が怒っていることに理不尽さを感じてるのはこっちなんだけどな。

俺は撫でるのを止める。

「機嫌直ったか？」

「うん。大海くんがもう一回撫でてくれたら許す」

「ばーか。あんま調子のんなよ」

「えへへ。バレた？」

やっと、笑ったか。

俺は綾に呆れつつも、密かに安堵したのだった。

で、気を取り直してダンジョンへ出発だ。

ダンジョンと言っても、高1が作る子供だましのようなもの。パネ

ルで教室が何カ所かに区切られており、そのパネルには黒い布が掛かっていて、虫や植物の絵がペタペタと貼られている程度だ。全体的に薄暗いのが、何となく不気味さを味合わせてるくらいだな。

「あはは。何となく雰囲気出てるかも」

「まあ、な」

綾も流石にいつもの屈託ない笑顔ではなく、苦笑いを浮かべていた。さて。こんな所で足を止めている時間はない。

「とりあえず、あそこに問題貼ってあるっぽいし、見にいこうぜ」

「そうだね。それが主だもんね」

一つ目の部屋の出口の隣に、長方形の紙は貼られていた。

「どれどれ……」

問題は、こんな感じだった。

『井伊直弼は、桜田門外の変で暗殺された。その原因となった、井伊直弼がアメリカと結んだ条約は何?』

……簡単すぎるだろ。

いや、まだ一部屋目だから簡単なのか?

「なあ、これ簡単だよな?」

「うえっ? あ、そ、そうだよね。こんなの簡単すぎて話にならないよね」

綾は視線を虚空に泳がせながら相槌を打つ。

「綾。お前……」

「え、嫌だなく大海くん。もちろん、わかってるよ」

「答え言ってみろよ」

「いや、ここは大海くんに花を持たせてあげるよ」

「持たせなくていいから、答えてみる」

「……ええーと、ワシントン条約、だよな?」

綾の答えに、俺はワザとらしく大きな溜息を吐いたのだった。そうだったな。綾は、ホントに馬鹿だったからな。はああ。

ちなみに答えは『日米修好通商条約』である。
綾が答えた『ワシントン条約』というのは、絶滅に瀕している動植物の国際取引を規制するものだ。
一応、豆知識ということで。

第3章 文化祭（14）

「景品おいしいね」

綾はう〇い棒をもぐもぐ食しながら、幸せそうな顔で俺の隣を歩いている。

景品とは、先程のアトラクションで全問正解した際にもらった物だ。〇まい棒5本。

まあ、さほど難しいわけではない問題10問を解くだけで、この報酬なんだから悪くはない。

ただ、俺が不満なのは、俺がほとんどというか、最早全部答えたのに、こいつが何食わぬ顔で既に三本目をもぐもぐ食していることだ。

「おい。綾」

「ふぁに（なに）ー？」

綾は、ゴクリとうま〇棒を飲み込む。

「お前、う〇い棒食い過ぎだろ」

「えー。いいじゃん」

「太るぞこの野郎」

「綾は太らない体質なのです」

綾は毅然とした態度で胸を張る。

「まあ、それはいいや」

というより、諦めた。

「んで、次は1年2組か？」

「うん。ではでは行きましょー」

綾は、いつの間にか5本の〇まい棒を食べ終わっていた。

「さて。ここが最後かな」

軽い昼食を摂り、14時半となった現在。

俺らは、3年3組主催の体育館で行われる『妖怪大迷宮』という名前の、つまりはお化け屋敷の前に立っていた。

「流石は3年生、だね。凄く、雰囲気出てる……」

確かに綾の言う通り、このお化け屋敷は本物にもほとんど見劣りしないものだった。

「おお、ホントに凄いな。何かテンション上がってきたわ」

「……大海くん、お化け屋敷好きなの？」

「ああ。結構好きなのかもな。昔はどうだったかわからないが」

「そっか……」

どうしたんだろう？

何だか、綾は楽しそうではないように窺える。

「綾、嫌か？」

「え？ ううん！ 凄く楽しみだよ」

「なら、いいけど」

うーん。どうも綾の笑顔が引きつっている気がする。

「次の方、どうぞ」

ついに俺らの番が来た。

綾がいいって言うてるからな。変に気を使いすぎるのもよくないだろう。

漆黒のカーテンで覆われた入口は、中でこれから起こるであろうおぞましさを醸し出していた。

「大海くん……」

「綾？」

入口を潜った途端。

綾が俺の腕に既にしがみついていた。

「おい、綾。お前そんなに怖い——」

そうか。こいつ、お化け屋敷が苦手なのか。

俺は減らず口を叩こうとした。が、すぐに綾の様子がおかしいことに気付く。

「おい、綾。大丈夫か？」

綾は、尋常じゃない程に全身が震えていた。

「ひ、大海、くん……ここ……ダメ……！」

綾は、本当にテンパっているようで、目を瞑ってかすれ声で俺に訴える。

「わかった。とりあえず出よう」

「……」

綾がゆっくり頷くのを確認してから、俺は綾の手を引いて、途中退出口から廊下へと出た。

「大丈夫か？」

「……うん。ごめんね」

「謝んなくていい」

俺はとりあえず、綾が落ち着くまで中庭のベンチで休憩を取ることにした。

「大海くん。もう、大丈夫」

しばらくして、綾が立ち上がった。顔色も大分良くなっている。

「そうか。でさ……」

何故、先程あんなにパニックに陥ったのか。

聞いていいのか、俺は少し躊躇った。

「うん。綾ね、暗所恐怖症なんだ」

綾は俺が聞こうとしていたことの答えを先取りして言う。

「暗い所が駄目っていう、あれか？」

「そう。あ、でもね、夜は大丈夫なの。綾が苦手なのは、人工的に作られた暗闇の空間」

人工的な暗闇……

「つまり、お化け屋敷とかは駄目ってことか」

「うん」

「馬鹿。何で先に言わねえんだよ。言ってくれば、流石に俺だってお化け屋敷に無理矢理入れたりなんかしなかったのに」

「えへへ。ゴメンなさい。昔のことだったから、今はもう大丈夫かな、て思ったの」

こいつ。

俺が楽しみにしてたから、言い出せなかったんだな。

無理しやがって……

そうか。1年1組のアトラクションの時も、あの苦笑はてっきり設備の不甲斐なさからきたものだと思っていたが、怖いのを押し殺して出来たものだったのか。

「はあ。全く、馬鹿だなお前は」

「ごめん」

「ホントに馬鹿だな」

「うう……」

「馬鹿野郎」

「いくらなんでも言いすぎだよ!」

「お前が、俺に気使ったりするからだ」

俺は溜息を吐く。

「だって、それは——」

「馬鹿。気を使ってお前が苦しむくらいなら、使うんじゃないかな、気を使うことは大事かもしれないけど、俺とお前は気を使わなければいけない程度の仲なのか?」

「大海くん……」

「俺は気を使わないでいられる、自分を大っぴらに出来る仲にまでなってると思っていたけどな」

って、何説教めいたことしてんだ俺は。ガラでもねえのに。

綾を見れば、何故か下を向いてプルプルと震えていた。

「綾?」

「大海くん大好き!」

「わっ」

俺が慣れないことをした恥ずかしさに打ちひしがれていると、綾が俺に抱きついてきた。

「ちょ、お前ここ色んな人見てるから！」

周りの一般の人達が俺らを指差してクスクス笑っている。写メとか撮ってる奴もいるし……

「でも、好きー！」

「わかった。わかったから離れろ」

綾に抱きつかれるなんて日常茶飯事になりつつあったのに、何で今こんなにも早く心臓が鼓動しているのだろうか？

綾を引き離している内に、文化祭もついに、閉幕へと向かっていた。

第3章 文化祭（14）（後書き）

そろそろ文化祭もフィナーレです！

と言っても、物語はまだまだ続く予定なのですが。。。

ここまで読んでくださっている方々、本当にありがとうございます

m () m

第3章 文化祭（15）

長いようで、短かった文化祭もついに終わりを告げ、15時となった。

俺と綾は、ほとんど15時ぴったしに教室に辿り着いたのだが、お客さんがまだ多く居り、タイムアップを悔しそうな表情を見せながら教室を去っていった。

「お帰りなさいませ、綾様」

「うん！ ただいま、瑞希」

「大海様と回れて楽しかったですか？」

「うん！ すっごい楽しかったよ」

「なら良かったです」

なんか、中澤って綾のお母さんみたいだな、ホントに。

一応綾のメイドらしいが、どうしてメイドになったのか、どういう経緯いきさつがあったのかも全く知らない。

「大海。広瀬さんと回れて楽しかった？」

中澤と綾のやり取りを俺の隣で眺めていた栞が、突然尋ねる。

「ああ。楽しかったぞ」

「そう」

あれ？ それだけ？

栞は、俺の回答を聞いてすぐに教室を出て行ってしまった。

「大海様」

「あ、ああ。どうした？」

「いえ。一応報告を。予算が5万円に対し、売り上げは、8万3500円でしたので、私達のクラスは掃除の心配はありません」

「おお、そうか！ 良かった」

「はい。それに、3万5000円を山分けして、一人あたり1400円給料があります」

中澤が俺に総売上や、どの飲み物がどれ程売れたのかについて書かれた紙を渡す。

文化祭実行委員は、予算の管理も仕事に含まれるため、後でこの書類を職員に提出しなければならない。

だが、そんなの後でいい。

とりあえず、今はやるべきことがある。

それは———教室の片付けだ。

「さて。やるか」

片付けは、夜の19時までとなっているが、明日は休日となっているため、明日にまで時間が掛かってもいいことになっている。

だが、19時から後夜祭があるため、思う存分に遊ぶためにも片付けはこの時間に何としてでも終わらせたい。

そして、また地獄の机運びが始まったのだった。

グラウンドには、かなりの人集りひとだかが出来ていた。

時刻は18時58分。あと2分で後夜祭が始まる。

机運びは、先程死ぬ気で終わらせた。

装飾の取り外しがすぐに終わったため、女子も机運びを手伝ってくれたからだ。

飾るよりも外す方が遥かに簡単だからな。

後夜祭の幕開けは、キャンプファイアーと共に行われる。生徒会の奴らが丸太がシャープの形に積まれている所に炎を灯すのだ。

今、生徒会の奴らが聖火のような棒に火を灯した。丸太の山の隣で19時になるのを今か今かと待ち構えている。

「18時まで10秒前！」

とことん、この高校はカウントダウンが好きだよな。

2日に渡る文化祭。準備も入れたら5日か。

もう5日も経ったんだな。何だか感慨深いものがあると同時に、余りにも充実しすぎていてあつという間だったな、という気持ちもある。

「3！」

でも、楽しかったな。

「2！」

でも、まだ終わりじゃない。

「1！」

でも、この後夜祭でホントに文化祭は終わってしまうのなら――――

「点火！！！」

楽しんだ者が勝ちだろ。

油を撒いていたのか、橙色の炎は下から上の丸太に轟々と文字通り燃え上がり、頂上の丸太にまで炎が燃え盛る。

「凄えな」

その、パチパチと音を立てながら天にまで昇りつめそうな朱い黄色の炎を見て、俺は思わず感嘆する。

夜空には星がまばらに散り、夜の暗闇を打ち消すように炎がグラウンド、校舎、ベンチ、花壇、そして俺たちを照らし出す。

ついに、後夜祭が始まったのだ。

第3章 文化祭（15）（後書き）

次回で、文化祭は終了です！

とりあえず、もう少して一区切り付きそうではっとしています。

第3章 文化祭（16）

後夜祭といっても、特にすることはない。

ただ、各自が好きなことをすれば良いという感じだ。20時に生徒会の方で何かするらしいが。

俺は炎から少し離れた位置のグラウンドと校舎までの道を繋ぐ土手の草原に足を伸ばして座り、フォークダンスの様子を他人事のように眺めていた。

好きなことをすれば良いと言っても、大体皆男女2人組になって、炎を囲ってフォークダンスを踊っている。まあ、定番っちゃ定番だ。楽しんだ者が勝ちと言ったが、俺はダンスとかそういうのは苦手なんだよな……

「大海くん、ここにいたんだ」

「ああ」

綾がいつしか俺の近くまで来ていて、俺に手を差し出す。

「行こう大海くん？」

「……そうだな。踊るか」

だが、綾と一緒に何だか踊ってもいいなと思った。

綾に手を引かれ、炎を囲って踊っている奴らの間に俺らが入り込み、綾と手を繋いで踊りを舞う。

舞う、よりかも足掻くの方が正しいが。

「大海くん、ダンス下手すぎ」

「やったことないんだから、仕方ないだろ」

「まあ、楽しければなんだっていいんだけどね」

それには、全くもって同感だった。

綾にステップやターンなどを何となく教えてもらいつつ、俺と綾はそれから30分ほど踊り続けた。

遠くで俺らを悔しそうに、そして悲しそうに眺めている者がいたことに気づかないままで。

20時を回った所で、突然生徒会長が音楽を停止させ、拡声器を使ってこれから生徒会による花火が始まることを告げた。

「花火だって。凄いね」

「そうだな。去年までは生徒会何もしなかったのに」

「そうなの？ あ！」

一発目の花火が空に撃ち上がった。

ヒューンと甲高い音を響かせながら、金色の光球が道筋を描きながら上空に舞い上がり、パァンと閃光が四方八方に飛び散る。

「綺麗ー」

綾は惚れ惚れしながら、その花火をジッと見つめている。

緑や青や赤や虹色の花火が次々と撃ち上がり、その全てがどれも美しかった。

「ずっと、こんな日々が続けばいいのに。あの日のように、無邪気で遊んでいられるような日々が、ずっと……」

「え？」

綾が何か独り言を言っていたが、花火の音で掻き消されて何を言っているのかわからなかった。

ただ、綾の横顔は何かの慈愛に溢れていた。

「……………」

そんな綾に、俺は何も言えなかった。いや、あえて何も言わなかったのかもしれない。

今は、無言でいるべきだと、本能が悟っていた。

「うーん。終わっちゃったんだね、ホントに」

花火が終わり解散になった後、文化祭実行委員は残って売り上げの報告に行かなければならなかったので、俺と綾は書類を纏めて担任に渡してから下校した。

「そうだな」

栞たちには先に帰るよう言っておいてあるので、今は俺と綾の二人きりだ。

「楽しい時間は好きだけど、あっという間に過ぎちゃうから嫌いだな」

綾の言いたいことはわかる。楽しい時間を、嫌いな人なんていない。でも、終わってしまった時の焦燥感が嫌なのだ。

「だったら、また楽しい時間を作ればいい」

「え？」

「楽しい時間がまたあれば、終わった後の焦燥感は消える。それが終わって焦燥感が出てきたなら、また楽しい時間を作れば、またその焦燥感は消える。そうやって、いくつもいくつも楽しい時間を重ね合わせて、焦燥感を覆い尽くせばいい」

綾は初めポカンとしていたが、クスッと優しい笑みを浮かべた。

「やっぱり、大海くんのこと好きだなあ」

「な、何言ってるんだよ」

俺は色々と恥ずかしくなって、歩を早める。

「綾？」

だが、綾が追いかけてこないの、俺は後ろを振り返る。

「大海くん」

綾は後ろの方で立ち止まっていた。

「どうした？」

「ありがとう」

俺はお礼を言われるようなことをした記憶がないため、首を傾げる。

「綾が無理矢理大海くんを実行委員にしたっていうのに、頑張ってくれて」

綾の礼を言った理由に納得がいった俺は「ああ」と頷く。

「俺だって、やるからにはちゃんとやりたいからな」

「うん。でも、あんなに嫌がってたのに、大海くんは本当に頑張ってくれてた。だから――」

綾はそこで一呼吸置く。

「ありがとう」

綾は誠心誠意を持って、俺にお礼を言った。

満月の青白い月光に照らし出された綾の姿は、普段の姿からは懸け離れ、何だか凄く大人びて見えた。

「どういたしました」

流石にここでお茶けるのは最低だよな。

俺はそんな綾に、誠心誠意を持って応える。

綾は俺の返事を聞くと、タツと俺の元へ駆け出した。

「!？」

そして、俺の頬に唇を押し当てた。

「なっ、お、お前！」

俺は慌てて綾から離れる。

頬を触れば微かに残っている湿り気。

「今のは、お礼だよ！　じゃあね！」

綾は逃げるように、さっそうと去っていった。

その横顔がどんな表情だったかは、暗くてわからなかった。

あいつ、俺にキスしやがった……

今まで、抱き着いて来たりとか手を握ったりとかはしてきていたが、キスなんて初めてのことだった。

やばい。俺、かなりドキドキしてる……

明日、綾にどんな顔して会えたいんだよ？

俺は一人、虚空にポツリと呟いた。

第3章 文化祭（16）（後書き）

第3章終了です！！

次回から、話が変わって夏休みに入ります。
時期外れですいません（ーーじ）

第4章 サマーデイズ(1)

暑いと言ったら、余計暑くなると言うので、ここは敢えて寒いと言おう。

「寒い！」

「大海、頭大丈夫？」

「すまん。大丈夫。暑さに頭がやられたわけじゃないから」
「そう」

夏休みに入り、俺は栞と並んで砂浜の上に裸足で立っていた。

俺は海パン一丁、そして隣の栞は白いビキニという格好で。

砂浜には、俺らの他にも学生が何人か、それ以外の大人達と数十人くらいの数の一般人が来ていた。

ビーチバレーや、スイカ割り、サーフィン、砂風呂、単純に泳いでいる人。

各々が自分たちのバケーションを堪能している。

くそ。綾達、いつまで待たせる気だよ。

俺と栞は綾と中澤が来るのを、太陽光を全身に浴びながらポツーンと待っていた。

栞も綾達と着替えていたのだが、時間が掛かりそうだから先に行っていると言われたらしい。

ああ、人間も光合成出来ればいいのに。

「お待たせー！」「お待たせしてしまって申し訳ございません」

焼き付けるような太陽光を浴びながら、実現不可能な希望を考えていると、やっと綾と中澤が現れた。

綾はオレンジ色の花柄のビキニ。中澤は、ワンピースのような薄い水色の水着を着ている。

2人ともスタイルいいな……

胸はどちらも大きくはないが、その存在感は確かにある。腰のライ

ンも整ってる

し――

「ゲフツ」

そんな2人を眺めていたら、栞に脇腹を肘打ちされた。

ちなみに、真吾も誘ったのだが、何故か断られてしまった。あいつ、女の子のビキニが拝めるというのに来ないなんて……よっぽどの野暮用でもあったのだろうか？

「全く。お前が突然海に行きたいなんて言い出すから、付き合ってやってんのに、30分も待たせるとか有り得ないだろ」

「ゴメンゴメン」

……綾とはキスの一件があったというものの、前と同じ関係を保っている。

文化祭翌日の朝、たまたまりビングで綾と鉢合わせしてしまったのだが、綾は余りにも普通に「おはよう、大海くん」と挨拶してきた。綾が全く気にしてないというのに、俺ばっか意識するのも難だと思いい、俺も普通に接することが出来たのだ。

何かバカみたいだな。綾にとっちゃ、頬にキスなんてスキンシップの一環に過ぎないのかもしれない。

それなのに、俺ばっかドキドキしちゃって、勝手に意識して……アホくさ。

「大海くん？」

「ああ。行くか」

「大海。準備運動してから」

「いててて！ し、栞、わかったから耳引っ張……痛い痛い！」

準備運動なしに海に走り出そうとした俺の耳を栞が引っ張って引き戻す。

「耳引っ張るなよ」

「じゃあどこ引っ張ればいい？」

「そりゃ、服――」

そして気づいた。

そうだ。俺、今服着てないんだった。

「でも、普通に肩でも掴めばいいじゃん」

「無理」

「何で？」

「だって、それは――」

栞は反抗しようとしたが、なぜか俯いて頬を染めた。

「男の素肌とか、触るの抵抗あるし……」

そして俯きながら、栞はボソボソと言いつきを紡ぎ出す。その横顔は、栞にしては

珍しく恥ずかしそうだった。

何だよ。栞も可愛いとこあんじゃん。

「大海の変態」

「何で!？」

俺が普段あんな栞にも可愛い所があるんだと安堵の笑みを作ると、栞に変態扱いされた。

「変態の瞳をした」

やっぱり、前言撤回。

栞は相変わらず、俺に冷たい。

というより、厳しい。

栞は昔からこんなだったのだろうか？

ふと、消失している記憶の中の栞の様子を考える。

……思い出せるわけないか。

俺は今だけは、自分が記憶喪失だということを恨めしく思った。

第4章 サマーデイズ(1) (後書き)

新章突入です！

最近、読者が減っている状況ですが……

めげずに頑張って書いていきますので、よろしくですm ((m

ここまで読んでくださっている皆様。
本当にありがとうございます！！

第4章 サマーデイズ(2)

準備体操を終え、ようやく海に入ることが出来た。

海は果てしなく蒼くて、太陽の光を乱反射してキラキラ光っている。

「ひゃあっ！冷たい！」

綾は潮が満ち引きする場所で足を潮につけながらガキのようにキヤツキヤと騒いでいる。

中澤はパラソルの下でパーカーを羽織り、一人読書。

栞は俺と並んでその様子を眺めていた。

「はあ。子供っぽい」

「そうだな」

綾は潮の満ち引きに足を取られ、尻もちをついた。

「大海。変わったよね」

「は？ 俺が？」

栞はフツと溜息混じりに次の言葉を吐き出す。

「違う。私達の生活が、何もかも」

それを悲しいことと思っているのか、嬉しいことと思っているのか。栞の横顔からは、どちらかなんてわからなかった。

ただ、俺が1つ言えることは――――

「変わったな、確かに。でも、変わってない」

「？」

栞は怪訝そうに俺の顔を覗き込む。

「綾達が来てから、俺達の生活は変わった。でも、俺と栞の関係は何も変わっちゃいないさ」

「……くさ」

栞はフツと俺を嘲笑った。

「うるせえ。ほら。んな面倒くさいこと考えてないで、泳ぎにいいぜ」

「そうだね。バカバカしくなってきた」
栞は再び嘲笑した。

「パンパカパーン。第1回、ビーチバレー大会」。イエーイ。パチパチパチ」

昼になり、中澤と栞が作ってくれたサンドイッチを頬張っていると、綾が一人で何か盛り上がっていた。

うん。うまい。

「で？」

「大海くん！ 何かなその『うわ、また面倒くさいこと言い出したぞこいつ』的な態度は！」

いや、誠に正解なんだが、わかっているならやめてほしい。しかも第1回ってなんだ。またやるつもりか？

「まあ、いいんじゃない？」

栞が意外にも乗り気らしく、綾に賛成。

中澤は、俺に任せるとも言いたげに無言。

中澤がどちらでもいいと言う限り、賛成側は既に2人いるんだ。

それに、あの栞が乗り気なんだから、まあ兄としてはやらせてあげたいわけだわ。

「よし。やるか！」

「心変わり早いね大海くん」

「気にするな。で、ルールは？」

「うん。まず2チームに分かれて――――」

綾が掲げたルールは次のような感じだった。

1. チームを二つに分け、2対2でやる。
2. 10ポイント先取。
3. レシーブを含めて3タッチ以内でボールを相手陣地に入れなくてはならない。
4. 負けたチームは、勝ったチームの言うことを何か1つ聞かなければならない。
5. バレーボールのルールに順ずる。

チーム分けの結果。

俺と栞チーム。綾と中澤チームとなった。

「ふふ。居候組VS本家ってとこだね」

綾は馬鹿なことを言って不敵に笑う。

いやいや、本家ってなんだよ。

「大海。絶対勝つよ」

「おう……って、うお！」

栞から凶悪のオーラを感じる。いや、何故この状況でこんなオーラ！？

「栞さん？」

「大海。言い忘れてたけどね、私、こういう勝負事は絶対に負けたくないの」

え、じゃあこのオーラは、絶対勝つっていうスポ魂的なオーラなのか？

「ああ。勝とうか」

「当たり前」

俺はそれがわかると俄然やる気が増してきた。

栞、お前変わったよな。

そんな表情、今まで見たことなかったよ。

そんな、ライバルとの対戦に心を踊らせているかのような表情。

……仕方ない。あれを使うか。

俺は集中力を高め、試合開始のサーブが放たれるのを待ち構えた。

第4章 サマーデイズ(3)

ボールを持っているのは現在綾。

こちらを見定めてから、綾がボールを真上に上げた。

大丈夫だ。見える。

集中力を高めて、例の目を解放しているため、綾がボールを弾き出すその瞬間までもがはっきりと見える。

腕の振り上げる角度、掌の向き、視線、上半身の傾きからして綾が飛ばそうとしているのは――――

葉のど真ん中。

まずは、様子見というところか。

いいぜ。やってやるよ、綾。

「葉、来るぞ！」

「え――！」

綾が驚愕の声を漏らす。

そりゃそうだ。

まだボールを撃ち放っていないのに、コースを読まれてしまったのだから。

軌道修正しようにも、今更遅い。逆に迷いが生じたのか、葉へと飛んでいったボールは易しいものになった。

「大海！」

葉がそのボールを軽々しくレシーブする。

俺はネットのやや上に上げられたその絶妙のレシーブをジャンプして掌が届く範囲に捉える。

相手陣地を見れば中澤が少し右よりの位置、綾が左よりの位置で待ち構えていた。

俺は2人の間の距離の midpoint やや後方の、ラインギリギリの位置に狙いを定めて、そこにスパイクをぶち込む。

「うおらっ！」

ズシャツ。

ボールは、2人がフライングレシーブをしようとした掌の先の砂浜に減り込んでいた。

「大海！」

「1点ゲット！」

俺は栞とハイタッチを交わす。

栞がこんなに嬉しそうな表情見せるなんてな。

「栞のレシーブトス完璧だったぞ」

「当たり前」

栞は得意気に胸を張った。

よし。この調子ならいける。

こちらがポイントを取ったため、次は俺らがサーブ権を持ち合わせる。

俺は栞がサーブを打ち放つのを、前衛でジッと待った。

#

「あ、有り得ない。あんな、ここにしかないという場所に寸分の狂いもなくボールを打ち込むなんて……」

綾は先程の大海のプレーに対し、冷や汗を浮かべていた。

綾と瑞希は、どこにスパイクされてもレシーブ出来る位置にいたつもりであった。唯一2人が届かない数センチのデッドスペースを除いては。

だが、現に2人はスパイクを決められてしまった。

その意味するところは、たった数センチのデッドスペースにドンピシャでスパイクを撃たれたということ。

「綾様。大海様はおそらく――」

「うん。わかってる。やっぱりあの人の息子だもんね」

瑞希が言おうとしたことを遮って、綾が頷く。

「はい」

「あの人の息子だから、私達は――！」

綾は途端に憎悪とも取れるような、悔しそうな表情を浮かべた。

「綾様」

「……ごめん。ちょっと落ち着こっか」

綾は昂ぶってしまった気持ちを鎮めるために、静かに深呼吸をして自分を落ち着かせることに努めた。

「さて。切り替えないと」

綾は栞のサーブに神経を研ぎ澄まし、次こそはポイントを取ってやると意気込んだ。

「あの目はそう長くは持たないからね」

綾は眼光をキラリと輝かせた。

第4章 サマーデイズ(4)

ズシヤッ。

ボールが砂浜に減り込む。

——俺達の陣地の、砂浜に。

「私たちの勝ちだね、大海くん」

「……」

スコアは、6ー10。

負けた。俺たちは、負けたんだ……

俺は砂浜に膝をつく。

敗因はただ一つ。

あの目の時間切れだ。

あの目は前にも言った通り、かなりの精神を浪費する。

だから、そんなに長く使えないのが現状だ。

だが、ビーチバレーの時間くらいなら持つと自負していた。

——綾による時間稼ぎがなければ。

綾は俺のスパイクが決まった瞬間、「あ、足が滑った」とか言いながら、ボールを遠くへ蹴り飛ばしやがったのだ。

目の短時間での切り替えは逆に精神を浪費する。

だから、俺はあの目を解放し続けていたのだが、6点目を取った時に限界がきてしまった。

綾の奴、毎回のようにボール蹴り飛ばしやがって。

まさか、あいつ、俺の目の能力に気付いてるのか？

……いや、有り得ないな。栞が知ってるならまだしも、転校してきた綾が知るはずもない。

俺はその可能性を即刻否定する。

たまたまだろう。

綾の足が滑りまくり事件を、俺は偶然だと思うことにした。で、正直言おう。

あの目を使えなくなっただけからのビーチバレーは、ほとんどワンサイドゲームだった。

レシーブして、相手陣地にボールを返すのがやっと。それ程に、綾と中澤はビーチバレーが上手かったのだ。というか、友達同士で上手い方なんてレベルじゃない。

プロにいてもおかしくないくらいのレベルの高さだった。

「大海」

「ああ、栞。ごめんな。負けちったよ」

「別に。大海は本気でやってくれてたからいい」

栞は確かに、不満そうな表情ではなく、むしろ清々しい表情をしていた。

「さてさて、大海くん。約束は守ってもらうよ」
ち。覚えていやがったか。

綾が得意顔でこちらに歩いてくる。

「ふふふ。何でもいいんだよね」

くそ。こいつ、勝ったからって相当調子乗ってやがる。

「私の願いはね。どうしよっかなあ。そうだ。私の――」

「勉強を教えてあげてください」

ピシッ。

綾の頬の筋肉が引き攣った音が響いた。綾の願いを中澤が横槍をいれて上書きしてしまったのだ。

綾は口をポカーンと開けたまま、ピキーンと固まっている。

ふむ。開いた口が塞がらないとは、こういう状況のことを言うのか。そして中澤、ナイスすぎる。

「ああ、そういえば、綾は赤点再試なんだっけ？」

俺はお返しとばかりに、満面の嘲笑いを浮かべながら綾に尋ねる。

綾は、「うう」とか「ぐぐうう」とか「あぐうう」とか色々唸っていた。

「……勉強を、私に教えてください」

が、結局、綾は肩を震わせながら俺に頭を下げた。

「何で私が勝ったのに、こんな負けた感じになってんの……」

綾の独り言を俺は聞こえていないフリをする。

まあ、試合に勝って結果で負けたという感じだな、綾よ。

再試は受からないとホントに進級出来ない可能性があるため、勉強せざるを得ないのだ。

「大海。出来れば私も教えてほしい……」

ああ。そういえば栞もそうだったな。

何かもうビーチバレーの結果なんか無意味になってるが、この際仕方ないだろう。

その後、すぐに俺らは私服に着替えて歩いて海を後にしたのだった。

第4章 サマーデイズ(5) (前書き)

遅れてしまつてすみません(／＼；)

第4章 サマーデイズ(5)

「あー、もう無理無理無理無理ー!!」

「こらこらこら。まだ30分もやってないのに、何もう泣き言言ってやがんだ」

「だってえ……」

全く。

わざわざ綾たちのために勉強を教えてやると言ってるのに、こいつといったら、駄々こねやがって。

海から帰ってきた翌日の朝。

こうして今俺らは冷房をガンガンに効かせたゆとり世代満喫のリビングで勉強会を開いていた。

中澤は今は買い物に出掛けていていない。

こんな暑い中、外に出て朝から徒歩で買い物に行く中澤は凄いを通り越して尊敬の域に値する。

普段なら栞が買い物に行くのだが、ご存知の通り栞も体よりも脳を働かせなくてはならない状況下にいるため勉強中。

綾も勿論その内の1人。

さらには……

「なあ大海。これって……」

「ああ、それもさっき言った二倍角の公式を使って――」

「ああ、オツケー。逆算すればいいんだな」

今日は真吾も赤点仲間の一人として勉強に励んでいる。

でもこいつは、勉強しないだけであって、物分かりは先程のやり取りでもわかるように異様に良い。

真吾はおそらく、再試も通るだろう。

だったら初めからやればいいのに……

まあ、そのツツコミはしたら負けな感じがするから言わないが。

「栞。大丈夫か？」

「……………」

栞はシャーペンを持って、ただひたすらにテキストの図形と睨めっこをしている。

「これは——」

「わかってる。半角の公式を使うことはわかってるの」

「いや、それ半角の公式使わないから」

栞は、シャーペンを持って再び固まってしまった。

シヨックだったんだな。自分の考え方が違くて。

「それは——」

俺は仕方なしに、栞に本当のやり方を道筋だけ教える。

どの公式を使うのか。どのような考え方をするのか。

それだけを教えてやり、答えは自分自身で出させる。

これが俺の勉強の教え方だった。

まあ、中澤は綾曰く、家庭教師の資格を持っているらしいから、中澤の方が教え方は明らかに上手いと思うが。

俺と中澤、役割逆にした方が良かったんじゃないか？

買い物のために外に出るのは嫌だが……

「大海くん」

「何だ？ やる気起きたか？」

「やる気起きないから、やる気起こさせて」

「やれ」

「命令!？」

「当たり前だろ。お前、マジで留年するぞ？」

「留年したらどうなるの？」

「俺のことを先輩と呼ぶことになるぞ」

「大海先輩」。あ、何かいいかも」

しまった。

留年を推進するようなことを言ってしまった。
綾は馬鹿みたいに（実際馬鹿なのだが）「大海先輩」と連呼し始める。

「綾。頼むから勉強してくれ」

「……大海くん」

俺の真面目な口調に流石の綾も少しは萎縮したみたいだ。

「この際言うけど、俺はお前と一緒にいると楽しいし、来年だって一緒に卒業したいと思ってる。だから、頑張ろうぜ。な？」

これは俺の本心だ。

こんな所で、綾の留年が決まって欲しくない。

「わかったよ。大海くんのために、頑張ります！」

いや、自分のために頑張るんだけどな。

……頑張ることに変わりはないから、細かいことは気にしないでおくか。

俺は綾に公式を覚えさせることから勉強を教え始めた。

第4章 サマーデイズ(5) (後書き)

学年末試験が近いため、しばらく休載します m (m
もうしわけございません。。。

第4章 サマーデイズ(6) (前書き)

学年末試験終わりました!!

遅れてしまって申し訳ありませんでした m () m

第4章 サマーデイズ(6)

結果から伝えよう。

綾は再試を通ったと。

過程を伝えよう。

……朝の2時まで勉強に付き合った、と。

綾の出来なさには、正直悪い意味で舌を巻いた。

いや、マジで大変だったんだ、これが。

もう眠くて敵わん。

綾が勉強に取り掛かってから、十秒後。

早速綾の手が止まった。

「大海くん……」

「ああ。これは二倍角の公式を使って……」

「二倍角の公式って？」

「教科書にあったろ。ええーと、これこれ」

俺は二倍角の公式が書かれたページを開いて綾に見せる。

「思い出したか？」

「えと、『コス』って何？」

「は？ コス？」

俺は綾の指が差す場所を凝視する。

しかし、どこにも『コス』などない。

「どれだよ？」

「だーかーらー。これだって。この、シーオーエスってやつ」

「お前、コサインcosのこと言ってるのか？」

「あ、それコサインって読むんだ。で、それって何なの？」

俺は絶句した。

絶句するしかなかった。

絶句しか出来なかった。

「？」

綾は無垢な目で首を傾げている。

嘘をついている様子はない。……残念がらな。

俺はこの瞬間、徹夜を覚悟した。

そこから、俺の奮闘劇が始まるわけだが、最終的には奥の手を使うしかなかった。

奥の手とは、俺が再試の問題を予測してその問題だけやり方を覚える、というものだ。

奥の手を使わなかったら、おそらく完徹しても終わらなかっただろう。

ま、結果的にホントに良かったわけだけど。

「大海くん流石だよ。大海くんの予測問題、ほとんど出たもん。

もう、問題を見た瞬間確信したね。ふっふっ。勝った！ってさ。あの時の優越感といったら――」

綾は先程から再試の状況を爪細やかに説明している。

我が校の再試は、主に数学だけ行われる。

世界史や化学は、文理選択を来年するにあたって、必要ではなくなる可能性があるため、再試は行われない。しかも、先生らの手腕で通知表の評価は、赤点であっても4を付けてくれる。

英語は、担当が再試作るの面倒臭いという自分勝手な理由で再試は行われず、課題。

……この学校、甘々だなホント。しかし、こここの高校の進学率は、決して悪くないというより、むしろ良いくらいだ。

これでよく、大学進学率を高い位置でキープ出来るものだ。
再試は、その場で採点され即刻返される。再試にかかる奴など10
人に満たないからすぐに終わるのだ。

今は、その帰りである。何故俺が学校に行ったかという、試験の
直前まで解法を叩き込みたかったからだ。

俺もホントにお人好しだな。

「大海くん、聞いているー？」

「聞いている聞いている」

全く聞いてなかったため、俺は生返事を返す。

「嘘でしょ？」

「まあな」

馬鹿な綾に嘘を見破られるとは……心外だな。

「潔いから許す……って、んなわけないよ！」

「どっちだよ？」

「さあ、どうだかわからない」

「いきなり古典来たよ。それ、古典単語の『いさ』の意味だろ」

「ザツツライト！」

「何でそんなの覚えてんだよ」

「古典単語って、日本の象徴だと思うんだ」

「はいはい。てか、テンション高いな。再試受かったからか？」

「ん？ それもあるけど、体育祭が近いからかな」

「ああ。体育祭ね」

我が校の体育祭は、珍しいことに夏休み中に開催される。

綾は何でこういう行事は全て把握しているのだろうか？

「栞。お前も再試受かったんだって？」

「当たり前」

「カンニングでもしたんだろ？」

「真吾。殺すよ？」

俺たちの後ろでは、栞と真吾がいつも通りのやり取りを交わしていた。

今日も平和だな。

体育祭が近づいている。

第4章 サマーデイズ(6) (後書き)

次回から、章変わって体育祭に入ります！
この話から物語が動き出す予定です。

これからもご付き合いいただければと思います(^^)

間章（前書き）

体育祭の前に間章です。

すいません……

次回から体育祭に入りますので。。

間章

#

コンコン。

「綾様」

ノックの音と同時に、瑞希が綾の名を呼んだ。

綾は突然の訪問に驚きつつも、何故か瑞希が来ることに對しての確信めいたものがあつた。

「いいよ」

綾の許可を得てから、瑞希が部屋にお辞儀をしながら入室する。

「少し話があつて、やって参りました」

「うん……瑞希。どう思う？」

瑞希の会話口調の重さに、綾は勘付いて瑞希に問う。

瑞希は綾に迷惑を掛けるようなことは絶対にしない。それなのに、夜遅くに綾の元を訪ねるなど、よっぽどのことでない限りあり得ない。

今考えられる『よっぽどのこと』など、考えなくても綾は容易に想像出来た。

「はい。私たちが転校した初日にあいづらに絡まれて以来、何もして来ないなんて、実際有り得ません」

そう。

それは、綾たちを襲撃した者の増援が全く来ないということだ。

「うん。そうだよ。綾たちのいる場所がわかってるのだから、いくらでも人をよこして取り戻せばいいものを、あいつは何もしてこない」

「場所を特定出来た。それなのに襲つてこないのはどうしてでしょう？」

「わからない。けど、何かしら理由があるはず。私たちを襲えない

理由が」

「あるとしたら……」

瑞希が言い留まったのに、綾が苦笑を浮かべる。

「うん。大海くんの存在」

大海の父親は、『狩野ファミリー』と呼ばれるマフィアのボスだ。綾の親父を頭とする『広瀬組』と呼ばれるヤクザの集団は狩野ファミリーと長年対峙してきた。

今は冷戦状態にあるとは言え、一触即発の勢いではある。

「大海くんがいたら、綾を襲った場合大海くんが多分抵抗する。そうなることを

あいつは望んでいな………え？」

「……おかしい。」

綾は突然、違和感に気付いた。

大海くんがいるから襲えない？

違う。むしろ逆だ。

「瑞希。おかしいよね」

「はい……私も今気づきました」

瑞希はそのまま続ける。

「確かに大海様が抵抗して、狩野ファミリーと戦を展開することになることを避けたいから、あいつらは躊躇しているかと思いました
が……」

瑞希は苦い表情を浮かべながら、先程までの見解を述べる。

「綾もそう思ってた。でも、違う」

瑞希がコクリと相槌を打つ。

「だって、綾は広瀬組の一味なんだよ？ だったら、狩野ファミリーが敵である綾を助けようとするなんて有り得ない。むしろ、大海くんがそれを頼んだ場合、狩野ファミリーに敵だと見なされて、大海くんの居場所がなくなる可能性まである。それは、あいつが望んでいることのはず」

広瀬組の頭である『広瀬辰磨』ひろせたつみは、狩野ファミリーである大海を嫌

わないわけがない。

大海の居場所をなくすチャンスであるかもしれないのに、それを出
来ない理由。

綾たちには、それがわからなかった。

「瑞希」

「はい」

「あいつが何も出来ない理由はわからないけど、いつ襲ってくるか
はわからない。だから……」

綾は真剣な瞳を瑞希に向ける。

「わかっております」

瑞希も綾の命令に応じ、真剣な瞳で答える。

「よし。それじゃ、この話はこれでお終い。もう寝よ？」

綾は先程の真剣さとは打って変わって、あどけない笑みを瑞希に向
けた。

「はい。おやすみなさいませ、綾様」

「おやすみ」

瑞希は、綾に一礼してから部屋を後にする。

（必ず、綾様を守ってみせます。この命、引き換えにしても……）

瑞希は決意を胸中に秘め、自分の部屋に戻った。

再試が終わった日の夜のことである。

間章（後書き）

わかりにくいところがあったら、教えていただけると幸いですm（
| | m

第5章 体育祭（1）

灰色の曇天の空を仰ぎながら、太陽の熱光線が無いだけ今日の気温はマシだと自分に言い聞かせながら、学校までの道程を歩く。

「ふぁーあ」

「あはは。大海くん、大きな欠伸だね」

俺のあくびに綾は呑気に笑い、

「大海。シャキツとしなよ」

葉は叱咤した。

「んなこと言われてもな……」

今日は、明日の体育祭に向けて誰が何の競技に出るのかについての会議があるため学校に行かなければならない。

何が悲しくて夏休みの真っ最中に、学校に行かなきゃならないのか。この学校もつくづくふざけてると思う。

「大海くんは何に出るつもりなの？」

「わかんね。余り物の競技でもやるさ」

「おいおい大海。お前絶対リレーには出ろよな」

何故か真吾が俺の思惑を打ち破るようなことを言う。

「何で？」

「もちろん、勝つためだけだよ」

真吾は、あたかも当然だと言わんばかりの表情だ。

「別にいいけど」

正直俺は何に出ようが別に構わなかった。さっさと決まって、さっさと帰れば何でも。

「よしよし……」

真吾がやけに満足気に頷くのを気味悪く思いながら、俺はあえて気にしないようにした。

さて。会議で決まったことをまとめて言おう。

俺が出る競技は、綱引きとクラス対抗リレー。

綾が出る競技は、100メートル競争と二人三脚リレー。

栞が出る競技は、障害物リレーとクラス対抗リレー。

中澤が出る競技は、二人三脚リレーと、クラス対抗リレー。

真吾が出る競技は、綱引きとクラス対抗リレーと障害物リレー。

という感じになった。

体育祭は文化祭ほど大掛かりな行事であるわけではなく、体育系の部活により、勝手に準備され、一日で終わる。

しかし、先程知ったのだが、優勝クラスには冬の雪掻き作業不参加の権利が与えられるらしい。冬の雪掻き作業とは、その字のまんま、冬休みに行われる学校周辺の雪掻きをすることだ。

毎年雪が積もるこの地域は、雪かきは必須の作業となっている。

だが、滅茶苦茶寒い中、わざわざ暖房の効いた部屋を飛び出して雪かきをするために外に出るなど、虐め以外の何物でもない。

生徒は全員強制参加なのだが、それに参加しなくていい権利が得られるとは。

これは、俄然やる気が増してきた。

「明日の体育祭、勝つぞ」

「大海くん、やる気満々だね？」

「もちろんだ。絶対勝ってやる」

「相手は三年生もいるんだよ？」

「んなもん関係ねえ」

「頼もしいなあ」

綾は楽しそうにうんうん頷いている。

「そうだよ大海。絶対勝つよ」

「ああ」

負けず嫌いの栞の言葉に俺の闘志が奮い立つ。

「体育祭は明日なんだから、まだそんなに闘志、^{たぎ}滾らせなくても…
…」

「何だよ真吾。冷めてんじゃねえか」

「大海さん、朝と性格全然違いますね」

俺らは互いに鼓舞し合い、明日の体育祭に対しての意気込みを確認し合いながら、士気を高めた。

第5章 体育祭（2）

雨がぱらついていた。

空を見上げれば、どんよりと暗雲が立ち込めている。

灰色やら黒やらの混沌とした雲が、空を完全に覆い隠していた。まるで、空が青いのなんて幻想だとも言うように。言い過ぎたか……？

ふと、今朝のことが脳裏に過った。

違うな。俺が今こんなに気分が優れていないのは、今朝のことをずっと考えていたからだ。

綾のやつ、何であんなに……

それは、綾が俺を起こしにきた時に起きた。

「大海くん。朝だよ。お天道様が私達の開戦を出迎えてるよ」綾の意味わからん目覚ましによって、現実に戻された俺はむくりと起き上がると同時に額に鈍い痛みを感じた。

「痛ってえー！」

「痛いよ大海くん！」

要は、何故か綾が俺の顔の目の前に顔を出していたらしく、俺の額と綾の額が衝突したのだ。

「何で!？」

「痛い……何が？」

綾は未だに額を押さえながら、こちらに顔だけ向ける。

「何で、俺の顔を覗きこむような態勢してたんだよ？」

「そ、それを乙女に言わせちゃいますか」

「乙女じゃないだろお前は」

「そんなことないもん！ 綾はれっきとした乙女だもん」

「……と、お前が乙女か否かはこの際どうでも……」

「乙女だもん！」

「わーったよ！ で、何で覗きこむようにしてたんだ？」

綾は急に黙り込み、テレテレし始めた。

「それは……」

「それは？」

「目覚めのキスでもしようかと……」

綾がキヤーッと、頬を押さえて悶える。

「……アホかお前は！」

そんなツツコミを言おうと思ってた。

「ふざけんな」

だが、実際口から出てきたのは、憤慨を表す言葉だった。

「え？」

俺が怒っているのを空気で悟った綾は肩をビクつかせる。

「ふざけんなよ、てめえ」

「ひ、大海くん？」

どうしたんだよ俺。何キレてんだよ。

綾のボディランゲージは、今に始まったことじゃないだろ。

「お前にとって、キスなんかどうでもいいことなのか？」

頭ではわかってる。それなのに、口が止まらない。

「好きでも無い奴に、簡単にキス出来るくらい、軽い女なのかお前は？ おかしいだろ。お前にとっちゃキスなんてどうでもいいこと

なのかもしれないけどな、俺にとっちゃ大問題なんだよ！ だから

―――」

「違う！！」

綾の悲鳴に似た叫びが俺の声を遮り、俺は我に返った。

「違う違う違う！ 好きでも無い人にキスするわけないでしょ！

何でわかってくれないの！？ 綾は大海くんのことを――！」

綾はそこまで言って、急に黙り込む。

「綾、お前……」

綾の瞳には涙が溜まっていた。瞳から溢れ出した涙が頬を伝う。

「―――っ！」

綾は涙の存在に気付くと、俺に背を向けて部屋を飛び出した。すぐに玄関のドアを開く音が聞こえ、乱暴に閉められたドアの音が、綾が怒っているのだと俺に示しているようだった。

綾に遮られた俺の言葉。あの時、俺は何を言おうとしていた？

俺は……

―――勘違いさせないでくれよ！

俺は確かに、そう言おうとしていたのだ。

第5章 体育祭（3）

そんなことがあったため、綾と会うのが凄く気まずい状況だ。
栞と中澤は先に家を出ていたため、このことは知らない。

「はぁ……」

ガラにもなく溜息をつく。

今日、体育祭だっていうのに。こんな状態じゃ勝てる物も勝てなくなってしまう。

切り替えよう。

目を瞑って俺は精神統一を図る。

「……………くそ」

しかし、どんなに精神統一を図ろうとも、今朝のことが思い出される。

降り止まぬ雨がそんな俺を弄ぶかのように、体を打ち続けていた。

校門に着く頃には、雨は既に止んでいた。

午後から晴れるのかはわからないが、雲が切れかかって太陽の光が滲み出ている。

「大海。遅かったね」

「栞か」

グラウンドに辿り着いた時、後ろから声を掛けられた。

既に半袖短パンの格好の栞はすでに臨戦態勢が整っているようだ。

「どうかした？」

ふと、栞が俺の様子に何かを感じたのか訝し気な表情になる。

「いや。何でもねえよ。それより今日は、絶対勝とうぜ」

「そう。当然」

俺は平静を装い、逆に無理に気持ちを昂ぶらせようと強気なことを言う。

栞は特に深くは追求せず、「着替えてきなよ」と言い残し、俺に背を向けた。

何とかバレずに済んだか？

いや……

栞もおそらく何かあったんだということは気付いてるだろう。

それでも何も聞かないのは、あいつの優しさなんだろうな。

「サンキュな。栞」

俺は栞の背中にお礼を呟き、更衣室へ向かった。

着替え終わり、外に出ると青空が雲の合間からその姿を覗かせていた。

やはり晴れたか。

太陽の光があるのとないののでは、やはり明るさとか温度はかなり変わるよな。

俺はグラウンドに出て、空を仰いでいた。

「！」

ふと、前を見ると。

そこにはあいつの姿があった。

距離にして10メートル前後。

向こうもこちらに気付いたようだ。しばし見つめ合う時間が続く。

何分……何秒そのままでいただろうか。

こんなにも緊張したのは初めてかもしれない。

すると、綾がこちらに近付いてきた。

どうする。どうするんだ俺。

綾に何を言うんだ？

綾が俺の目の前に立ち塞がった。

綾の口が開く。

第5章 体育祭（4）

「今日は絶対勝とうね大海くん！」

「え？」

俺は思わず聞き返してしまった。

——今朝はゴメンね。

——今朝のこと気にしないでいいから。

——もう、綾に話しかけないで。

綾が言うであろうことは、幾つも予想していた。

その、どれを言われても良いように心の準備はしていた。

だが、現実には綾が言ったことは、全く予想打にしていなかった。

綾の奴、今朝のことをなかったことにしやがった。

「どうしたの大海くん？」

「綾。今朝のことだけど——」

「ダメ」

俺が今朝のことを話題にしようとするが、綾がそれを遮って阻止する。

「綾」

「今朝のことは忘れて」

「でもな……」

「お願い——！」

綾は地面に顔を向けながら、肩を震わせていた。

何でこいつは——

俺は小さく溜息をつく。

「わかったよ」

「大海くん……」

「わかったから、泣き止めよ」

綾の頭に掌を乗せて、綾を落ち着かせることに専念した。

「うん、ありがとう大海くん」

綾は俺に笑顔を向けた。

どうしてこいつは、今朝のことをこんなにも無かったことにしたいのだろう。

まるで、俺と普段通り話せなくなるのを恐れているみたいに。今まで築き上げた関係が壊れてしまうのを恐れているかのように。

「さ、大海くん。そろそろ開会式だよ。行こっ」

綾が俺の手を引っ張り、開会式が行われる朝礼台の前へと導く。

「ああ」

綾がどうしてそこまで恐れているのかはわからない。

でも、何もわからない俺にでもしてやれることはあるはず。

俺が綾にしてやれることと言えば――――

「綾。今日は絶対に勝とうぜ」

俺の力強い言葉に、綾は一瞬驚いたような表情になるが、

「うん！」

すぐに笑って俺に頷いた。

俺が出来ることは、綾を元気付けること。

俺は綾に引っ張られるがままだった手を、逆に握り返して俺が引っ張ってやる。

「ひ、大海くん。そんなに急がなくても！」

「急がば回れだよ」

「それ使うタイミング違うから！」

やっと、本調子に戻って来たかな。

空は完全に晴れ上がっていた。

俺は、そう思い込んでいた。

第5章 体育祭（5）（前書き）

地震、びっくりしましたね。。。。
先程まで、学校に閉じ込められていました（笑

第5章 体育祭（5）

開会を告げる校長の長ったらしい話を馬耳東風の勢いで聞き流しながら、俺はひたすら暑さに耐え忍んでいた。

雨が止んだのは良いにしても、湿度は高いままのため異様に蒸し暑い。

高温多湿で直射日光モロ直撃って……熱中症の条件オールスターズが揃っているじゃねえか。

こりゃ倒れる奴絶対出てくるぞ。

……既に出ているんだがな。

校長の話中に倒れた奴は、視界に捕らえただけでも10人を突破していた。

「それでは、あまり長いと皆さん大変でしょうなので、これで開会の言葉を締めくくらせていただきます」

やっと終わったか。気付くの襲いんだよ、おっさん。

それにしても校長の奴、かなり元気なおっさんだな。年齢^{よわい}50を遊に超えているだろうに、この状況下でずっと立ち続けていた上に話していられるとは。

俺が校長を初めて敬った時だった。

「障害物リレーに参加する人は――――」

軽い準備運動を済ませてから、体育祭が遂に幕を上げた。最初は、障害物リレーだ。

栞と真吾が出場するんだったな。

「栞」

俺は栞の背中を見つけたため、声をかける。

「大丈夫。負けるわけない」

栞はふっと、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「頑張れよ」

「うん」

栞は俺に背を向けると、自分のポジションへと向かった。

「真吾」

「おう」

「こけるなよ」

「頑張れとかじゃねえのかよ！」

「じゃあ頑張れ」

「うわっ。てきとー」

真吾が呆れ顔でやれやれと俺に背を向けた。

「勝てよ」

俺の最後の一言に、真吾は一瞬顔をこちらに向けるがすぐに前を向き直し、右腕を空に伸ばして見せた。

その口元は笑っていた。

頼んだぞ二人共。

俺は二人を見送ってから、観客席の方へと戻る。

土手の芝生の部分がクラス毎の待機場所となっており、そこで応援をすることになっている。

「大海くん。ここ」

綾が俺の分のスペースを取ってくれていたらしく、綾の隣を指差して手招きした。

「ドキドキするね」

綾はやや興奮気味なのか、目をシリウスの如く輝かせている。

「ああ」

体育祭最初の競技が始まるという興奮と、自分のクラスが勝てるか

という緊張。

それらが、俺を揺り動かしていた。

「それでは、プログラムN O・ 2、障害物リレーを始めます」

プログラムN O・ 1は準備体操となっていたため、障害物リレーはN O・ 2となる。

「位置について」

グラウンドに静寂が舞い降りる。

第5章 体育祭（6）

「位置に着いて」

第一走者の動きが止まる。

「よい——」

第一走者がモーションを取る。

パン！

ピストルの乾いた音が鳴り響いて、遂に障害物リレーが始まりを告げた。

障害物リレーは、クラスから選出された8人が各々に立ち塞がる障害物を突破してバトンを回して、ゴールを目指すというもの。

400メートルトラックと中々広いグラウンドに恵まれたこの高校では、8人でトラックを一周する。つまり、1人辺り50メートル進まなくてはならない。

最初の障害物は『袋飛び』だ。

大きな袋に両足を入れて、ぴょんぴょん跳ねながらゴールラインを目指す。

これ、傍から見るとかなり滑稽だな。

「上位は、2年3組、3年2組、3年1組、2年2組です！しかし、全てのクラスの距離がほとんどないという混戦状態！まだまだわかりません」

放送委員のアナウンスが言うように、俺らのクラスの一年二組は9クラス中8位だが、一位との差はほとんどない。そのまま第二走者にバトンが渡る。

2つ目の障害物は『梯子潜り』

縦向きに横たわっている梯子の、足をかける板と板の間を潜り抜けるというもの。

「3年2組、3年1組、2年2組が2年3組を抜きました！2年3組梯子を潜れずに停滞しています！その間に全てのクラスが抜かしていきます！」

トップで袋飛びを抜け出した2年3組は、梯子潜りで中々抜けられずに停滞したため、一気に最下位へと転落した。

俺らのクラスは中々早く抜けられたため現在6位。中々良い順位だ。

3つ目は『網潜り』

地面に敷かれた網を地面を這って潜り抜けるというもの。

「現在上位は3年2組……っと、順位が変わりました！3年1組が3年2組を網潜りで抜かして1位！2年2組網に足を捕られストップ！その隙に、2年3組、1年3組、3年3組、1年2組が抜かしていきます」

後ろにいた3年3組に抜かされてしまったが、現在6位だ。

現状維持はしている。あとは――――

4つ目は、『コーンドリブル』

5つ等間隔で並べてあるコーンの間をサッカーのドリブルで抜いていくというもの。

頼んだぞ、真吾。

俺らのクラスの第四走者は、真吾だ。

このドリブルは、上手い人と下手な人でかなり差が出る。

今、真吾へとバトンが渡った。

第5章 体育祭（7）

真吾はバトンを受けるとすぐに、目の前にあるコーンへドリブルを開始する。

真吾はコーンを、初めは右足のインサイドを使ってコーンに当たらないギリギリの所で躲し、ワンタッチで左足のインサイドを使って二つ目も抜く。

真吾は両足のインサイドを交互に使ってリズム良く次々コーンを抜いていった。

それかなり速い。

5タッチで5本のコーンを躲した真吾は、第五走者へと一直線にドリブルで走る。

「真吾ー！」

俺は思わず叫んでいた。

真吾がこんなにもかっこ良く見えたのは初めてかもしれない。

あいつは運動神経だけはかなり良いというのに、使い所を間違えていたからな。

「1年2組速いです！ 現在上位は、3年1組、3年2組、2年3組、1年2組です」

流石だなあいつ。

6位から4位にまで順位上げやった。

でも、少し2位と3位の差があるな……

1位と2位はほとんど差はないが、2位と3位の差が10メートル弱くらいある。

真吾が第五走者へとバトンを渡す。

5つ目は、背中ボール運び。

二人で背中を合わせ、その背中と背中の中に先程ドリブルしてきた

ボールを乗せて、ゴールラインまで運ぶというもの。

これが意外と難しいのだ。

お互いの歩幅を合わせなくてはいけない上に、背中を離してもボールを落としてしまう。

しかも、ただ背中を合わせていればいいという問題ではなく、しっかり挟んでおかないと背中の上をボールが転がっていつてしまつて落ちてしまう。

「全てのクラスがボールを落としてしまつて、中々ゴールに辿り着けません！ あ、今3年3組が抜け出しました。それに少し遅れを取つて……2年3組が抜け出しました！ 3年2組、先程のリードを守れず3位に後退です」

10メートル弱差があつた順位も第五走者だけで、ひっくり返つてしまつた。

俺らのクラスもボールを落としまくり、5位へと後退。

これは、1位は難しそう——いや。

6つ目は『ラケットリフティング』

テニスボールをラケットでリフティングしながら、ゴールへ走るというもの。

「3年3組早いです！ 細かくリフティングを繋ぎながらあつという間に第七走者にバトンを渡しました。続いて、2年3組がリフティングを始めます。続いて、3年2組と2年2組が同時にスタート」1位とは大分差がついている。

俺たちのクラスも、微妙な位置だ。

3年2組が3位でバトンを繋いだ時、1年2組はリフティングの真っ最中。

だが、まだあきらめないぞ。

7つ目の障害物には魔物が住むと言われているからな。

これはあくまで実話らしいのだが、7つ目の障害物で、20メートルの差を引っくり返して優勝したクラスがあるらしい。逆に言うと、1位でも最下位へと転落する可能性があるということ。一体、どんな障害物なのだろうか。今、第七走者にバトンが渡された。

第5章 体育祭（8）

7つ目の障害物は——『輪投げ』

「って、輪投げ!？」

魔物が住むと言われている7つ目の障害物の正体に、俺は思わず驚嘆の言葉を漏らす。

「大海くん、どうかした？」

「お前、魔物が住むと言われている障害物が輪投げって聞いて驚かないのか？」

「え、何で？」

「……いや、何でもない」

綾が驚いていないのにはもう驚かないぞ。

こいつは、一般人とは感性が違うからな。

ていうか、魔物が住むって誰情報だっけ？

もしかしたら、ガセだったのかもしれない。

「3年3組、何回やっても輪が入りません！ その間に、2年3組が追い付いて輪投げを始めます」

しかし、そんな考えは崩れ落ちることになる。

あれだけあった差が、輪投げという子供騙しの遊びでゼロになってしまったのだ。

輪投げは、定められた線から数メートル離れた白いポールに、輪を投げて入れるというもの。

輪が入った瞬間、最終走者の元へ走り向かっていいのだが、輪が入らないと、外した輪を回収してからまたラインに立って投げなければならぬ。

勿論、決まるまで永遠ループ。

「2年3組入れました！ 3年3組を抜かして、1位です！」
断トツで1位だった3年3組が、抜かされてしまった。

――7つ目の障害物には魔物が住む。

ふと、脳裏を例の噂が過^よぎる。

まさか、ホントに住んでるのか？

甲子園に魔物がいるのと同じように、この輪投げにも、魔物が。

「ま、ないない」

俺はあっけからんと、今やった想像を否定する。

たまたま輪投げが入らないだけじゃないか。

ま、おかげで俺らのクラスも順位を一つ上げることができたし。

3年3組は6位にまで転落し、俺らのクラスは現在4位。

1位との差は約15メートル。

俺らのクラスも輪投げを抜け出すのに、意外と時間が掛かったからな。

どのクラスも一度は外している所を見ると、輪投げは意外と難しいらしい。

まあ、確かに魔物が住むと言われてもおかしくはないわな。

遂に障害物リレーも大詰め。

最終走者へとバトンが渡されようとしている。

「栞ー！」

俺は「頑張れ」という意味を籠めて名前を叫ぶ。

「栞ちゃん！」「委員長ー！」「狩野さーん！」

最終走者は、栞だ。

栞は俺と綾、他クラスメイトの応援に手を挙げて応え、バトンを受け取る姿勢を取った。

頑張れよ、栞。

再び心の中で呟く。

今、栞にバトンが渡された。

最後の50メートルが始まる。

第5章 体育祭（9）

最後の障害物は、『平衡感覚走』

バットを軸に10回転したあと、目が回った状態でゴールラインまで走るといふもの。

何かこれ、障害物競争じゃなくて、最早単なるイジメなんじゃ……
栞は現在バットを軸に回転している途中。

1位の3年3組はフラフラになりながらもあと20メートルでゴール、という位置にいる。

「障害物リレーも大詰め！ 全てのクラスがフラフラになりながら、ゴールを目指しています。何だか惨めです！ もう、頑張れとしか言いようがありません」

おい、放送委員。

今のは侮辱と取られてもおかしくないぞ。

俺は、放送委員の暴言に毒付く。

と、栞が回転を終え走り出した。

「え？」

「ひ、大海くん」

流石に綾でもこれは驚いたか……て、そんなのどうでもいい。

栞は、あれだけ回転した後だというのに、真っ直ぐに50メートルを疾走していた。フラフラする素振りなど全く見せない。

「すげえ……」

最早、感嘆しか出なかった。

「い、1年2組、恐ろしく速いです！ 普通に50メートル走をやっているのと大差ありません！ あ、2年2組を抜かしました！ 現在3位です！」

何で栞の奴、あんなに普通に走れるんだ？

そういえば聞いたことがある。

猿は木と木の間を飛び渡ったり、枝にぶら下がり揺れるということ

に慣れているため、平衡感覚が異常に良い、と。

……栞、スマン。

今、栞のこと侮辱するようなこと言っちゃった。いや、決してお前が猿だと言いたいわけじゃなくてだな。

……申し訳ない。

俺は心の中で栞に謝罪する。

「栞ちゃん行けえー！！」

「栞ー！！」

気持ちを切り替えて栞の応援に徹する。

「1年2組、3年2組を抜かしました！ 凄い、凄すぎます！」
あとは、3年3組だけだ。

「3年3組と1年2組の距離がどんどん縮まっています！ 3年3組、ゴールまであと1メートルです！ どちらが勝つのでしょうか！」

3年3組は未だに目が回っているらしく、おぼつか覚束ない足取りでゴールのテープへ向かっている。

栞と3年3組の距離がほぼゼロになった。

「いけええー！！」

1年2組の声が揃う。

瞬間。

ゴールのテープが切られた。

「ゴォール！！ 遂に、障害物リレーが終わりました！」

そんなこと見てたらわかる。どっちだ？

どっちが勝ったんだ？

肉眼で見るにほぼ同時に見えたが……

「結果は————」

放送委員の声にグラウンドに静寂が訪れる。

「3年3組が1位です！」

ワァーッと3年3組の控え場所から、歓喜の叫びが轟いた。

「あぁーっ。惜しかったなあ」

綾が悔しそうにガクツと項垂れる。

「……」

かなり追い上げただけに、負けた悔しさはかなり大きい。
だが。

「2位なんだから、大健闘だろ」

「うん。そだね」

栞が帰ってきたら、精一杯褒めてあげよう。
よく頑張った、と。

俺の提案に綾は当然とばかりに、笑顔で頷いた。
クラスメイトもそれに同意する。

障害物リレーは、2位で幕を下ろした。

まだ、体育祭は始まったばかりだ。

第5章 体育祭（10）

さて。次は俺の番か。

プログラムNo. 3は、クラス対抗綱引きだ。

長いロープを、クラスから選出された男子10人が引っ張り合い、ロープの中心から左右に3メートル程離れた位置に貼ってある赤いテープが、地面に引かれた白線を越えたら終了。相手側にある赤いテープを白線に持ってきたクラスが勝利となる。

小難しく説明したが、要は普通の綱引きと変わらない。

綱引きは、総当たり戦——とは言っても4試合しかやらないのだが——で行われ、勝者に得点20点が贈られる。時間制限があり、タイムオーバーの場合は、両クラスに10点ずつ与えられ、敗者は0点。

先程の障害物リレーが1位50点。2位35点。3位25点。4位10点。5位5点。6位以下0点となっているため、1勝20点はかなり高い。4連勝すれば80点ももらえるしな。

「真吾、絶対勝とうぜ」

「当たり前よう！」

真吾と闘志を滾らせ合い、綾たちに見送られて俺らは綱引きへと旅立った。

ここは何としても4連勝して得点を稼ぎたい所だ。

「行くぞ！」

「「おう！」」

クラスリーダーの男の掛け声に皆が返事をする。

絶対に勝つ！

俺らはグラウンドという名の戦場に降り立った。

「すまない」「すみませんでした」

俺と真吾は、栞と綾と中澤の前で土下座をしていた。

「全く。1勝2敗1分けなんて、情けない」

栞の文句に言い返す言葉もない。

俺らのクラスは綱引きでボロボロの結果で終わってしまった。

でも、言い訳を言うわけではないが、1年生が3年生にパワーで勝つのは無理があった。

スピードならまだしも、フィジカルに関しては負けを認めざるを得ない。

同じ1年生のクラスには勝ったが、2年生のクラスに引き分け、3年生のクラスに2敗した。

「ま、まあまあ栞ちゃん。大海くん達も頑張ったんだし」

「栞様。綾様の言う通り、あまり責めないでやってください」

綾と中澤のフォローにより、栞は諦めたようで、俺らはそれ以上罵倒されることはなかった。

「すまない、栞。それに綾、中澤も」

「別にもういい」

「まだまだ次があるよ!」

「これからでも逆転できますから、心配ないです」

栞はそっぽを向きながらも許してくれ、綾と中澤は励ましてくれた。持つべきは仲間だな、やはり。

改めて仲間の大切さを思い知った瞬間だった。

第5章 体育祭（11）

中学生による競技が終わった後、次は100メートル競争の予選となった。

「それじゃ、行ってきます！」

綾が俺らにビシッと敬礼して、グラウンドへと向かう。

「綾」

その背中に声をかけると、綾が振り返った。

「勝てよ」

綾は俺に勝気な笑みを浮かべると、親指を突き立てた。

頼んだぞ、綾。

100メートル競争は、予選は同じ学年同士で1位を決め、本選では各学年の1位同士が争う。

つまり、本選は1、2、3年生が競い合うのだ。

100メートル競争は、予選1位が20点。2位が10点。3位が5点となっている。

これだけだと余り得点を稼げないと思うだろうが、本選は1位50点、2位30点、3位10点となっている。

そのため、予選の20点に、本選の得点が上乗せされ、予選を通過するのとしらないのでは、かなりの差が出る。

今、男子が予選を終え、俺らのクラスの代表は2位だったため予選落ち。まあ仕方ない。

ビリじゃなかったただけマシだ考えよう。

そして、次は女子の番。

頑張れよ、綾。

「続いて、女子の100メートル競争を始めます」

放送委員のアナウンスに、女子の先頭の綾を含めた3人が立ち上がる。

「緊張するな」

「そだね」

栞も緊張感を隠しきれずに少しソワソワしながら、固唾を吞んで見守っている。

だが、綾のやつは――――

笑っていた。

「位置について」

静寂。

「用意――――」

パン！

乾いた音と共に、ランナーが一斉に飛び出す。

「綾――！」

綾のスタートは完璧だった。

フライングにならない絶妙のスタートダッシュ。

そして、何よりすごいのが――――

「1年2組速いです！ぶっち切り！ぶっち切りで1位！2位以下の人とどんどん距離を離して行きます！」

そのスピード。

下手をすれば俺よりも速いかもしれない。

蒼髪のポニーテールが風に揺れて、空中で遊ばれている。そんな中、綾の横顔は、やはり楽しそうに笑みを零していた。

「速いな」

「綾様は、運動神経は抜群ですから」

隣にいた中澤が俺の呟きに、誇らし気に応える。

100メートル競争は、綾が2位と3秒さをつけるという圧勝で予選を通過した。

第5章 体育祭（12）

「今から、1時間程昼食時間を取りたいと思います」

100メートル競争が終わり、中学生のダンスが披露された後、昼休みとなった。

「大海、こっち」

グラウンドの片隅にある大木の下に、先に陣取りしていた栞が俺を手招く。綾と中澤に、真吾も一緒だ。

一人分のスペースを開けて、可愛い白のシートの上に円を描くように三人は座っていた。

「待たせたな」

俺はトイレに行っていたため、遅れて輪に入る。

「よし、じゃあ食おうぜ」

真吾を筆頭に、全員が「いただきます」と唱えてからそれぞれの弁当にありつく。

「あれ。そういや、栞。俺の弁当は？」

栞は俺の疑問に、ワザとらしく咳をたてた。

「あー、ひろみごめんー。べんとうつくるの、わすれてたー」

そして、かなり棒読みでそんなことを言い出した。

「ええーと、栞。ツツコミをいれたいのも山々だが、今のガチか？」

栞はコクリと頷いた。

「ひ、大海くん」

「ん？」

「綾ね、大海くんのためにお弁当作ってきたんだー。栞ちゃんもお弁当作るの忘れちゃったって言ってたし、調度よかった。いやはや、偶然偶然」

綾はいかにもワザとらしく、水色のランチボックスを俺に差し出す。この二人。組んでたな。

まあ、別に弁当があるならいいが。

「ああそうか。サンキューな、綾」

「へ？ う、うん。どういたしまして」

綾は顔を赤くして、自分の弁当をがつつきだす。

さて。俺も食べるかな。

俺はランチボックスから、水色の弁当箱を取り出し、蓋を開いた。

「おおっ」

視界に広がるのは、虹色の世界だった。虹色の淡光が弁当箱から放たれ――

「て、おかしいだろ！」

俺は今更になって、弁当にツツこむ。

「大海くん、どうしたの？」

「綾、これはなんだ？」

俺は虹色の具材を箸でつまみ上げながら、綾に聞く。

「え？ からあげに決まってるじゃん」

何言ってるの的な顔をされてしまった。

いや、これはおかしい。

虹色のからあげなど、存在し得るのか。いやしない。

「これ、食えるのか？」

「食べ物から作ったんだから、食べれないわけないよ」

やばい。めっちゃ不安になってきた。

「な、中澤」

「大海様。女の子が一生懸命お弁当を作ってくれたのに、一口も食べないのは、どうかと思います」

中澤に助けを求めるが、無駄だった。

でも待てよ。中澤がこう言うということは、もしかして見た目によらず味は大丈夫だったりするのか？

俺は虹色の、綾曰くからあげをつまみ上げる。

いつの間にか全員の視線を集めていた。
行くぞ。

自分に言い聞かせてから、その虹色の物体を口に放り投げる。

「!？」

「例え、この世に存在してはいけないような味でも」

中澤の呟きを最期に、俺は意識を失った。

第5章 体育祭（13）

「大海起きろ！」

「！」

耳元で大声で名前を呼ばれ、俺は現実意識が覚醒した。

「大丈夫か？」

目を開けば、俺は大木の下に敷かれたシートの上で横になっていた。隣には、真吾が座っている。

「あれ、俺何で倒れてたんだ？」

「思い出さない方がいいと思うぞ。きっと当人もそう思ってる」
「？」

真吾の言葉が理解出来ず、俺は首を傾げた。

「んなことより、次は二人三脚だぞ」

真吾が俺の背中を軽くはたく。

「あれ？ 昼休みは？」

「んなもん、とつくに終わったよ」

あれ？

俺の記憶では、まだ昼休みに入ってなかった気がするんだが。

「俺、どんだけ寝てた？」

「ざっと1時間くらい」

マジか。そんなに寝てたのか。

一体俺に何があったんだ？

真吾は知らない方がいいとか言うし。

「大海、気にすんなって。ホラ、始まるぞ」

「ん」

俺は後頭部を掻いてから、まあいいか、と気持ちを切り替えるのだった。

「位置について、用意————」

パン！

もう、火薬の音にも大分慣れたな。

二人三脚が始まった。

二人三脚は、15メートル離れた位置にあるコーンまで二人三脚でいき、ターンして再びスタート地点に戻って次の人にバトンを渡す。それを1クラス5組が行い、5組目がゴールした順位で得点が決まる。

ちなみに、1位50点、2位35点、3位25点、4位10点、5位5点、6位以下0点と、二人三脚リレーは障害物リレーと全く同じ得点となっている。

「2年3組転倒しました！ 現在上位は、3年1組、3年3組、2年2組となっています」

1年2組は2組目にバトンが渡った段階で現在6位。

何でこう、俺らのクラスは序盤は中途半端な順位なんだろう。

「2年2組転倒しました！ その間に2年1組、1年1、2組が抜かしていきます」

よし。

他人の不幸を願うのは余りよろしくないが。この際仕方ない。

5位で3組目にバトンが――

「あ、1年2組バトンを落としました！ その間に3年2組が抜かしていきます」

畜生。バトンミスかよ……リレーじゃあるまいし、するか普通？

だが、起こったことを愚痴愚痴言うのは好きではない。そんなことしたって、どうにもならないからな。

バトンミスの影響もあり、現在1年2組は7位。

1位との差は、半周遅れくらい。

「今、3年3組が最終組にバトンを渡しました！ 続いて2年1組がそれを追いかけます」

もう、あの2人に頼るしかないな。この差をひっくり返せるのは、

あの2人しかいないだろう。

——綾と中澤。

今、1年2組の4組目が綾にバトンを渡した。

第5章 体育祭（14）

俺はついつい笑ってしまった。

……予測はしていた。

100メートル競争ぶっち切りの綾と、超人である中澤のペア。しかも、2人の息は同調している。

だから、かなり速くなるであろうということは。

でも、いくらなんでもこれは――――

「二人三脚の順位を発表します。1位、1年2組」

半周という距離をこの2人は、引っくり返したのだ。

何と言うか、もう反則的な速さだったな、あれは。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

中澤と綾が得意顔で帰ってきた。

「お疲れ」「おつ」「お疲れさん」

栞、真吾、俺の順に2人を出迎える。

「お前ら速すぎ」

「綾と瑞希が本気出せば、こんな物ちよろいよ」

俺の賞賛に、綾が自慢げに胸を張る。

「さてさて。そろそろ行って来ますかね」

綾が休む間もなく、再びグラウンドに向かおうとする。

今は中学生が何かやっているが、その後は100メートル競争の本選があるのだ。

「綾、負けるなよ」

「大海くん」

綾は途端に飽きれ顔になった。

「綾を誰だと思ってますか」

「……そうだな」

どうやら余計な心配だったらしい。

綾は例の笑みを浮かべて、グラウンドへ向かった。

綾は宣言通り断トツで1位を取り、そのあと行われた玉入れでは4位。

現段階で俺らのクラスは総合3位だった。

「大海くん。綾は出れないから、頑張つてとしか言いようがないんだけど……」

次は、体育祭最終競技であるクラス対抗リレー。

これで、全ての順位が決まると言っても過言ではない。

勝てば総合優勝できるし、負ければ出来ない。それだけだ。

クラス対抗リレーは、1位100点、2位50点、3位30点、4位20点、5位15点、6位10点、7位以下0点と、1位と2位の点差が50点もある。

要は、1位にならなかつたら総合優勝も無理だということだ。

「頑張つて」

「おう」

綾の声援に応えるためにも、何としてでも絶対1位を取ってやる。

俺は第1走者と、リレーにおいてかなり重要な所を走る。

スタートは、かなり重要だからな。

我らのアンカーは、真吾だ。あいつは、運動神経はかなり良いからな。信頼できる。

リレーに出ないクラスメイト全員の思いを、俺は背負っている。

責任重大だなこれは。

俺は決意を固め、グラウンドへと赴いた。

スタート位置へと案内され、バンダナを頭に巻き、バトンを持ってクラウチングスタートの姿勢を取る。
絶対に勝つ！

第5章 体育祭（15）

「位置について、用意——」

腰を上げて、スタートの準備をする。

パン！

一瞬、ほんの小さな痛みが走った。

だが、そんなものの気にせず、火薬の音と同時にスタートを切って、俺は走り出す——つもりだった。

「え？」

自分で自分に驚愕する。

体が、動かない……

そんな。嘘だろ？

これに勝たないと優勝出来ないのに。第1走者は重要なのに。

だが、体は気持ちに背いて、全く動かない。

何なんだよ。

何故だか眠気もする。ダメだ。この眠気、逆らえない。体も動かないし……

くそ。こんなところで倒れるわけには……

バタンツ。

俺は地面に倒れ込んだ。

そのまま、俺の意識はブラックアウトした。

#

迂闊だった——！！

綾は自分に対する憤怒に満ち溢れていた。

体育祭に襲ってこない理由なんかないのに。完全に油断していた。先程のリレーのスタートの銃声。その時。

スタートの銃声に紛れて、もう一発の銃声を綾の耳は捕らえていた。そして、その瞬間。大海は倒れた。

おそらく命に別状はないはず。

綾は今まさに、狙撃犯を追いかけている最中^{さなか}だった。ただ、がむしやらに、憎悪を持って全力で疾走する。

「！」

綾は、グラウンドと校舎を挟むようにして置かれてある裏門に、黒いベンツの車に乗ろうとしている男を視界に捕らえた。

「辰麼いー！！」

「……」

狙撃犯————広瀬辰麼は、綾がこちらに向かって来ていることを理解すると、フツと気味悪く微笑し、車の扉の前に立った。

「辰麼、てめえ大海に何した？」

そこへ綾が向かう。が、黒いスーツの男らが綾が辰麼に近づくのを妨げた。

黒いスーツの男らに取り押さえられながら、綾は尚も辰麼を睨み続ける。

自分の血の繋がった親父に。

「流石だな綾。一般人に気付かれないように、スタートの銃声と同じ時に放ったのだが。お前にはバレていたようだな」

辰麼は余裕たっぷりの笑みで綾を称賛した。

「黙れ。目的は何だ？」

綾は明らかな殺意を向けて辰麼に問う。

「さあな。自分で考えてみたらどうだ？」

綾は辰磨の人を嘗^なめたような態度に、ギリツと歯をきつく噛み締めた。

「そうそう。俺が放った銃弾は、標的^{ターゲット}の脊椎と胸椎の中間、その上部を掠めて、瞬間的に圧迫した。今俺が言ったようなことをやられると、脊髄神経が麻痺し、首から下が動かなくなる。5分程すればまた動けるようになるが、即効性の催眠弾で撃ったからな。しばらくは起きない」

それは、神業に近いことだった。常人の腕では並ならぬことを、辰磨は平気でやってのけたのだ。

「そんなことよりいいのか？」

綾は辰磨の意味深な言葉に、訝しげな表情になる。

「急に意識を失ったんだ。脳が受けるショックは大きいはずだが？」

「！」

綾はその途端に悟った。辰磨の今回の目的を。

辰磨をぶん殴ってやりたい気持ちがあった。

だが、綾一人でこの男らを相手するのには分が悪すぎる。

「くそ！」

綾は方向転換し、グランドの方へと走り出した。

「ふ。まだまだだな、綾よ。……出せ」

辰磨は、車が発車したあとも不気味に笑い続けていた。

第5章 体育祭（15）（後書き）

緋弾のエリア？

を参考にさせていただきましたm
┌
└
m

第5章 体育祭（16）

綾は大海の元へと急いだ。

綾の目には、涙が溜まっていた。

今まで一緒に過ごしてきた日々が、大海の中で消えてしまう。

そんな思い、二度もしたくない。

そう誓ったはずなのに、そのような事態が起きてしまった。

それに対して、油断していた自分への憤怒、起きたことへの悲哀、辰磨への憎悪。

それらが綾の中で溢れかえり、溢れ出た分として涙が流れたのだ。

「大海くん……！」

———お願い！

最後のは、声にならなかった。

今、綾に出来ることは大海の記憶が消えていないと願うことだけ。

嗚咽を漏らしながら、綾は大海が運ばれたであろう医務室へとひたすらに走り続けた。

「大海くん……！」

乱暴に医務室の扉を開けた綾は、白いベッドの上で眠っている大海を見つけた。

医務室では、ベッドの隣に座っている白衣の女性と、瑞希がその傍に立っていて、綾を驚いた目つきで見っていた。

「綾様」

「！……ごめん」

綾は自分の行動が場違いなことに気付くと、気持ちを鎮静させる。

「どんな感じですか？」

綾は必死に慌てる気持ちを抑えて、落ち着いたトーンで白衣の女性——おそらくは保険医であろう——に尋ねた。

「特に問題はないわよ。おそらく夏バテじゃないかな？」

「そうですか。よかったです……」

綾は言葉とは裏腹に、表情は嬉しそうではなかった。

「瑞希」

「……はい」

綾の眼差しから瑞希は何かを感知し、保険医に「それでは、よろしくお願いいたします」と言い残し、医務室から退いた。

医務室の扉を閉めてから、瑞希は心のスイッチを切り替える。

「誰の仕業ですか？」

瑞希のその全てを理解しているような質問に、綾は心強さを覚えながらも、嬉しさは見せず、先程あったことを包み隠さず全て話した。

「遂に、仕掛けてきたんですね」

綾の話を聞いて、瑞希は珍しく悔しそうに拳を握り締める。

「うん。あいつの狙いは、大海くんの記憶の消去」

「しかし、何故記憶を消すような真似を？」

「そんなの、私を苦しめるために決まってる————！」

綾は校舎の壁に拳を叩きつけた。

「……瑞希」

「はい」

綾は、瑞希の目を見つめる。

そして————

「もし、ホントに大海くんの記憶が消えちゃったら、どうしよう……」

「綾様……」

瑞希の胸に顔を埋め、再び、幼い頃に戻ったように涙を流した。

「大丈夫です」

「う、ううう……」

「大海様は、記憶を無くしてなんかいません。絶対に」

「うん……うん……！」

瑞希は、綾を優しく抱きしめた。

しばらく二人は、そのままの状態です時を費やした。

後にリレーが再開され、大海の代わりに別のクラスメイトが走り、1年2組は4位で優勝を逃したのだった。

第5章 体育祭（17）

#

長い間眠っていた気がする。

暗闇の中で俺を呼ぶ声が聞こえた気がする。

俺は、一体どうしたんだ？

———大海……くん。

今、何か聞こえた。

俺を呼ぶ、幼い声。

幼い声？

———競争だよ。

何だこれは？

断片的に聞こえてくる幼い声。途切れ途切れに聞こえる温かい声。

———約束だよ？

競争？ 約束？

何のことだ？ もう、訳がわからない。頭痛がしそうだ。

……なら、忘れてしまおうか。

そうか。悩みの種にしかない記憶なら、いらないじゃないか。
そうだよな。忘れたって、別に———

「大海くん！」

「！」

突然、俺の思考回路を力強い声が遮断する。

その声が誰の物であるかは、わからないわけなかった。

ああ。

何を考えていたんだろう俺は。

あいつとの記憶まで放り投げようとしていたのか。

……ふざけるな。

そんなこと、絶対にさせねえぞ。

俺は、暗闇から逃れるために目蓋をひらいた。

「大海くん！」

「うわっ、と」

瞼を開いた瞬間、綾が俺の顔前に顔を覗かせていた。どうしたんだろう？ 目が少し赤い気がする。

「……………」

「どうした？」

綾は何故か不安そうな表情をしていた。

「大海くん、綾のことわかる？」

「は？」

突然、何を言い出すんだこいつは。

「だから、綾のことわかるかって聞いているの！」

「なんだよ、当たり前だろ？ どうしたんだ、お前」

「————！」

綾は俺の言葉を聞くと、涙を零した。

「え、ちょ、お前どうしたんだよ？ 何で泣いて————」

「泣いてない！」

「いやいや、泣いてるだ————」

「泣いてないから！」

素直じゃねえな、こいつは。

これ以上言っても無駄だと思い、俺は口を結ぶ。

「そういえば、栞たちは？」

「皆、先に帰ったよ」

「え？　てか、今何時？」

「夜の7時を回った辺りかな」

「7時！？」

どんだけ眠ってたんだ俺は。そりゃ、皆帰るよな。

「綾は、残ってくれてたのか？」

「当たり前だよ」

「そうか……ありがとな」

俺は綾の頭を撫でる。

綾は、えへへと顔を綻ほころばせた。

「それじゃ、帰ろ？」

「そうだな」

「あ、大海くん、歩ける？」

「大丈夫だ」

実際ベットから下りて、立ち上がってみてもフラつきなどはない。

「じゃ、帰ろっか」

「ああ」

それにしても、さっき何で綾は泣いたんだ？

今も、俺が起きて嬉しい、というよりも、何かに安堵しているように見える。

「大海くん、行こっ」

綾は俺の手を引いていく。

ま、いいかな。そんな細かいことは。

俺は毎度のごとく、気にしないことにした。

夜の空では、三日月が雲の合間から顔を覗かせていた。
曇ってきたな。

綾とどうでもいいようなことを話しながら、帰路を並んで歩いて行く。

「え？ 真吾が運んでくれたのか？」

「そうだよ、あの時の霧島くん、かつこよかったなあ」

あとで、真吾にお礼言っておかないとな。でも、今綾のやつ、真吾のこと「かつこいい」とか言ったか？

いやいやいやいや。言葉の文あやだろう。

何嫉妬してんだ俺は。

嫉妬？

「大海くん？」

「あ、悪い。何でもねえから大丈夫」

「そっか。それにしてもよかったあ」

綾はカバンを持って、クルリと一回転する。

「何が？」

「ホントに不安だったんだよ？ 大海くんがまた記憶喪失になっちゃうんじゃないか、って」

……あれ？

俺は、ふと違和感に襲われた。

何なんだ、この違和感は。何か、今おかしいことがあった気がする。考えろ俺。

違和感が起きたのは、綾の言葉を聞いた直後だ。ということは、綾の言葉の中に何か違和感の正体があるはず。

————ホントに不安だったんだよ？ 大海くんがまた記憶喪失に

なっちゃうんじゃないか、って。

綾の言葉を頭の中でリピートさせる。

———大海くんがまた記憶喪失になっちゃうんじゃないか、って。

「！」

そして、俺は違和感の正体に気付いた。

「綾……」

「んー？」

———大海くんが、「また」記憶喪失に……

「何でお前、俺が記憶喪失だって知ってんだ？」

第5章 体育祭（17）（後書き）

次回から話変わります。

読んでくださっている方、本当にありがとうございます！！

第6章 日常の崩壊（1）

「……」

沈黙。静寂。

そんな単語が頭の中に思い浮かんだ。

ベットに横たわり、部屋の白い天井を意味もなく見つめる。

豆電球という、ちっぽけな光がただ部屋を照らし出していた。

「綾……」

先程のことが頭を支配している。

何であいつ……

俺は再び、先程のことを思い返した。

……
……
……

「何でお前、俺が記憶喪失だって知ってんだ？」

綾は、俺の問いに驚いたように目を見開いた。

「え、何のこと？」

ところが、すぐにへらへら笑いながらとぼけて見せる。

「綾、お前、今『また』って言っただろ」

「言ったかなあ」

「言っただろ」

「そんなこと言ってないよ。大海くんの聞き違いじゃ——」

「綾——！」

「！」

俺はそんな綾の態度に痺れを切らし、叫んでしまった。

なんで、こんなにも俺は必死になってるんだ？

何故だか、今うやむやにしてしまったらしい気がした。このことが、俺にとって凄く重要なことのような気がした。

「綾、頼むから教えてくれ」

「……………」

「綾！」

綾は顔を俯かせたまま動かない。

「言わない」

「え？」

「絶対言わないから」

「どうして？」

「どうしても」

「わかんねえよ、綾」

「わかんないか。わかってたけど、ホントに、覚えてないんだね」

綾は悲しそうな顔で、苦笑する。

「だから、何でお前が記憶喪失のこと知ってんだよ？」

俺は本題に帰って、綾に聞いた。

「それは、大海くんが自分で見つけないと意味がないよ」

綾の言葉に、俺は困惑するしかなかった。

「意味、わからねえよ」

「わかって」

「無理に決まってんだろ！」

「わかってよ！！」

「！」

綾がこの話題になってから、初めて感情を露わにして叫んだ。

「お願いだから、わかってよ—————！ どうして、わかってほしいの！？ 綾が、今までどんな思いで大海くんと接してきたか。全て、思い出してよ—————！」

綾の目には、涙が溜まっていた。その感情の雫が頬を伝う。

綾がどんな思いで俺と接していたのか。

全て思い出して欲しいという綾の懇願。

全てが、意味わからなかった。

「綾……」

「——っ！」

綾は、俺に背を向けて逃げるように走って行ってしまった。

俺はそれをただ眺めるしかない。立ち尽くすしかなかった。

今の俺に、綾を追いかける力は残っていなかった。

………

………

……

とにかく、わからないことだらけだった。俺の失われた記憶の中に、何があったっていうんだ？

そもそも何で、俺は記憶喪失になっている？

今まで、過去の記憶など無くてもいいと思っていた。でも、それじゃ駄目だ。

俺は過去に何があったか知りたい。いや、知らなければいけない。

明日、栞に教えてもらおう。

俺は決意を固めてから、ゆっくり目を閉じた。

視界はブラックアウトしたが、意識は中々ブラックアウトしなかった。

第6章 日常の崩壊（1）（後書き）

遅れてすみません……

少し話の展開の整理をしていたもので。。。

第6章 日常の崩壊(2)

#

「はあ……」

時刻は朝の0時を回った辺り。大海と、あのようなことが起こった次の日である。

月は雲に隠され、光など皆無に等しい砂浜で、綾は一人うつつを抜かしていた。波の音が綾を包むように響いている。

(何やってるんだろ、綾は)

綾は深く溜息を吐く。

今まで、大海の記憶喪失には触れず、あたかも初めて出会ったかのように接してきた。

だが、大海の記憶が消えてなかったことで気が抜けてしまい、今まで隠してきたことを全てぶち撒けてしまった。

(バカだな。せっかく、大海くんとリセットして、綾のことを好きになってもらえるように頑張ったのに……これじゃ、全部パーじゃん)

綾が転校してきた初日に大海に告白したのは、大海の記憶が本当になくなってしまっているのかを調べるためだった。

そして、大海の態度から記憶喪失であることを理解した。

初めは、ショックであった。だが、起こってしまったことを嘆いていても仕方ない。

綾は嘆きたい気持ちを抑えて、大海に好きになってもらえるように努力してきた。

変に昔、綾と大海は接点があったということを言って困惑させるより、そちらの方が最善の気がしたのだ。

大海の鈍感ぷりに痺れを切らして、体育祭の朝にはつい抑えていた

感情を爆発させてしまったが。

「大海くん」

ボソリと愛しい人の名前を呟く。

（明日からどうしよう。大海くんはどうやって接すれば……？）
流石になかったことには出来ない。大海がそんなこと許さないだろう。

全て打ち明けてしまおうか。

ふとそんな考えな頭に浮かんだが、即刻却下する。

全て打ち明けたって、記憶がないのでは意味がないし、何度も言うように、ただ困惑させるだけだ。

「はあ……」

再び溜息をつく。

自分を励ますためにここに来たのに、どんどん溜息の数を重ねてしまっている気がする。

これでは本末転倒だ。

ジャリッ。

「！」

砂を踏みしめる音に、綾は咄嗟に振り返る。

しかし、期待した人物でなく、思わず落胆してしまった。

「どうしたの、こんな時間に？」

「ちよつと、気分転換にな」

「そっか」

会話が途切れる。

（どうしょ。話題が全く浮かばない。綾らしくないなあ）

「じゃあ、綾行くね」

気まずさに耐えきれなくなった綾は、その場を立ち去ることにした。
綾は立ち上がり、海に背を向ける。

「なあ」

「？」

ところが、後ろから名前を呼ばれ振り返った。

「え？」

刹那。

ドスッ、という鈍い音。
迸る痛み。

すぐ近くにある顔。

下をみれば、鳩尾に入った拳が。

「うそ……」

綾は力が抜けて、砂浜に倒れ込んだ。

「ごめんな……許してくれ。命令なんだ」
綾の意識が朦朧とする。

（駄目……意識が飛んじゃう）

砂を必死に握り締めるが、意識の混濁には抗いようがなかった。
「どうして……」

そして――――

「真吾くん……！」

犯人の名前を最後に、綾は意識を失った。

第6章 日常の崩壊(3)

#

「大海様！」

朝の目覚めは、珍しくも中澤によるものだった。

「どうしたんだ？」

中澤の尋常ではない慌てた態度に、脳が一瞬で覚醒する。

「落ち着いて聞いてください」

それは中澤だろ、と言いつうになつたのを抑えて神経を研ぎ澄ます。

「綾様が、どこにもいないのです」

「は？」

中澤の話によると――――

朝、いつも通り綾を起こすために、ドアをノックしたのだが応答がない。

仕方なしに無断で部屋へ入ると、部屋はもぬけの殻だった、ということだ。

「大海様。行きましょう」

「え？」

「綾様を探しに行きましょう」

中澤は、玄関のドアの鍵を開いて外へ出ようとしている。しかし、俺の足は動けずにいた。

「どうされたのですか、大海様」

そんな俺に中澤が怪訝そうな表情を浮かべる。

「中澤。俺は綾と一緒にいいのかな？」

俺の足が動かないのは、躊躇いがあるからだ。

昨日の夜に言われたこと。

——綾がどんな思いで大海くんと接してきたか。

あれは、俺と接するのが辛いと暗に示していた。

「俺は綾を苦しめているだけじゃないのか？」

俺の言葉に中澤は小さく溜息を零すと

「確かに。その通りです」

ゆっくり頷いた。

ズキッ。

自分で聞いておきながら、いざ頷かれると胸が痛む。

「でも、綾様は大海様と一緒にいると辛くなるなんてこと、一番わかっていました。それなのに、綾様が大海様と一緒にいることを選んだ理由、わかりますか？」

辛くなるのに、俺と一緒にいることを選んだ理由……

「どうして……？」

中澤は俺の目を見据えた。

「綾様は、大海様のことが好きだからです」

中澤から告げられた事実には、俺は驚くことはしなかった。ただ、納得していた。

わかっていた。

ホントはわかっていたんだ。

綾は俺のことが好きだってことくらい。

でも、何かと理由をつけて、そんなこと有り得ないと自分に言い聞かせていたんだ。

「大海様。大海様は、綾様のことをどう思っているのですか？」

……そうだな。

綾は、俺のことが好きなんだ。だったら、俺もそれに応えなきゃだよな。

「俺は——」

今までのことを振り返る。

転校初日に、突然告白してきた綾。

居候して、同じ屋根の下で過ごして。

いつも一緒に登下校して。

文化祭だって、一緒に回った。

体育祭だって励ましあった。

時には喧嘩もして。

時にはドキドキさせられて。

綾の笑顔。綾の声。綾の行動。

それら全てが、今も鮮明に思い出される。

そして、それら全てが……

それらのどれもが、ホントに楽しかったんだ。

俺は導き出した。

わかりきっていた答えを。今まで誤魔化していた気持ちを。

「俺は、綾のことが好きだ」

俺の出した答えに、中澤は微笑む。

「なら、どうしますか？」

「どうするって……そんなの、探しに行くに決まってる」

「はい。行きましょう」

中澤に手引きされて、やっと見つけた答え。

俺は中澤と共に、家を飛び出した。

「大海」

「？」

扉を半開きにしながら、後ろを振り返ると栞が私服姿で玄関に立っていた。

「私も行く」

栞の目は真剣そのものだった。

おそらく、今の話を聞いていたのだろう。

今まで一緒に過ごしてきたんだから、黙って見とくわけにはいかない。

そんな決意を、栞の目が語っていた。

「わかった。行こう」

俺ら三人は同時に家を飛び出した。

第6章 日常の崩壊（4）

真夏の容赦ない日照りの中、必死に綾の姿を追い求める。

走るに走って、街の至る所を探してきた。

高校、駅周辺、商店街……

だが、そのどれにも追い求めている者は見つからなかった。

三手に分かれて探しているのだが、二人からの報告は未だゼロ。

「くそっ」

息切れに耐えきれなくなり、膝に手をついて肩で息をする。

ヴウー、ヴウー。

「！」

突然、バイブの振動を感じて、ポケットから携帯をすぐ様取り出す。

発信者は———栞！

「見つかったのか！？」

だが———

「ごめん」

俺の期待は一瞬にして粉碎された。

「そうか……どうした？」

「一度、休憩しよう？」

「……そうだな」

こんな炎天下で2時間以上走り回っていたのだ。無理をしすぎれば、

熱中症になってしまう。

無理は禁物、だな。

俺らは一度公園に集まることにした。

そういえば———

朝はバタバタしてたせいで聞けなかったが、俺と綾の過去についてまだ教えてもらってない。

公園で聞いてみるか。

俺は公園へと急いだ。

公園に着いた時には、既に二人共ベンチに座っていた。

「一応聞いておくが、見つかったか？」

二人の傍に寄ってから、二人に問うが、二人は同時に首を振った。

「大海様も―――」

中澤が聞く前に、俺は首を横に振って否定した。

「そうですか……」

沈黙が、訪れる。

太陽はこんなにも眩しいのに、俺らの辺りだけは、影で覆われてしまっている気がした。

「私、飲み物買ってきますね」

沈黙を破ったのは、中澤のそんな言葉だった。

俺らに背を向けて、商店街の方へと走っていく。

今こそ、聞く時かな。

俺は栞の隣に座る。

「栞」

「なに？」

「大事な話がある」

俺の真面目な雰囲気を感じたのか、栞は「うん」と素直に頷いた。

「俺と綾について、教えてほしいことがある」

栞はこくりと頷く。

「単刀直入に聞く。俺と綾は、昔に会ったことがあるのか？」

疑問の形を取ったが、俺の中では、それはほぼ確定していることだ

った。

「……………」

栞は何も応えない。

肩を震わせて、ひたすら何かに耐えているようだった。
耐えている？ 一体何に？

「栞。そうなんだよな？」

「……………」

「栞」

「……大海」

グイッ。

突如、強い引力が胸倉を襲った。

突然の事態になされるがままの俺は、栞の方へと引き寄せられた。

「！」

そして。

栞の唇と俺の唇が重なった。

——え？

第6章 日常の崩壊(5)

一体何が起きたのか。

最初は、それが理解できなかった。

何で――――

何で、栞と俺はキスをしているんだ？

「！」

俺は栞を思わず突き飛ばしてしまう。

「な、お、おま……」

呂律が上手く回らない。

「何で？」

落ち着いて、何とかそれだけを紡ぎ出す。

「大海……が……から」

「え？」

栞の声が小さくて、よく聞こえない。

「大海のことが好きだから！」

「！」

今度ははっきりと聞こえた。

栞は、俺のことが、好き？

「嘘だろ？」

「嘘で告白なんてするわけない！」

栞の瞳は強い光を宿していた。強い意志を持った者の瞳。

本気なのか？ 本当に。

栞は、俺のことが好きなのか？

「大海のことが好きだから、だから色んな嘘をついてきた」

「……俺と綾は、昔会ったことがあるということを隠したことか？」

栞はコクリと頷き、続ける。

「それもそうだし、他にもある」

「中澤のことか？」

「うん。中澤さんはホントに初対面」

じゃあ、何だというのだろう。

「私と大海は、血の繋がっていない兄妹なんかじゃない」

「え？」

それなら、何だというのだ。

「私と大海は、血の繋がった兄妹」

朶の言ったことが、初めは理解できなかった。

同じことを言ったような気がしていたのだ。

だが、微妙に違った。

血が繋がっているか、いないか。

「な、何で血が繋がっていないなんて嘘を？」

俺の当然出るであろう質問に、朶は自嘲気味に小さく溜息をつく。

「大海のことが好きだから」

……理由になってないだろ。何で、俺のことが好きだと、血が繋がっていないなんて嘘をつくんだ。

……まさか。

「血が繋がった兄妹同士の恋なんて、御法度にも程がある。だから、血が繋がっていないことにして、可能性を広げようとしたのか？」

告白された本人が、こんなこと聞いていいのだろうか。

何だか自分が、告白されて自惚れている人のような気がして良い気はしない。

「うん。その通りだよ」

朶は俺の推測を、溜息混じりに肯定した。

「でも、わかってるんだ」

朶は空を仰ぐ。その瞳には、キラリと光を反射するものがあった。

俺は思わず朶から視線を逸らす。

「大海が好きなのは綾。昔と変わらず、大海は綾のことが好きなんだよね？」

昔と変わらず、ということとは——

「昔の俺も、綾のことが好きだったのか？」

「うん。直接口にしたことはなかったけど、絶対にそうだった」

「そうか……」

昔の俺も、記憶が無い俺も、どちらも狩野大海だということに変わりはないということか。

同じ人を好きになるなんてな。

「栞」

「なに？」

「ありがとう」

「！……何でお礼なんて言うの」

俺は栞の頭にそっと掌を乗せる。

「ちゃんと、全部話してくれたから」

「……ばか」

栞は俺の言葉を聞いて、何かが切れたようにポロポロと涙を零し始めた。

俺の前ではいつもクールを装って、泣き言なんてほとんど言わなかった栞。

俺の気持ちたちがどこにあるかを知っていても尚、俺のことを好きでいてくれた。

いつも、俺の傍にいてくれた。

「何で、もっと私を責めないの？　今まで隠してきたんだよ？　嘘ついてきたんだよ？」

「栞」

俺は栞の顔を自分の胸に押し付けた。

「ごめんな」

「何で、大海が謝るの……」

そんな栞を、誰が責めることができようか。

「俺は綾が好きだ。でも、栞のことも大切なんだ」

俺は栞を離し、栞の目を見つめる。

「だって栞は——俺の妹なんだから」

そして、そう言い切った。

「そんな言い方……ずるいよ」

栞は涙を拭って、薄く笑った。

「大海」

「何だ？」

「綾たちが転校してきた日の帰りに、私と綾が話があるって、はぐれたことがあったよね」

「ああ」

「あの時ね——」

栞は、あの時のことについて話し始めた。

第6章 日常の崩壊(6)

#

栞と綾の二人は、大海たちとはぐれ、沈黙の中を歩いていた。

綾は栞の後ろを等間隔の距離を空けて付いていく。

しばらく二人が歩いた後。

栞が人気のない路地裏で、ふと立ち止まった。

「ねえ、広瀬さん——ううん。久しぶりだね、綾」

言い切ってから、栞が後ろを振り返る——つまり綾と向き直った。

「そうだね。久しぶり、栞ちゃん」

綾は屈託ない笑みを浮かべて、栞の挨拶に返事を返す。

「んで、聞きたいことがあるんだけど」

綾はニコニコを崩さない。

「何？」

「綾に謝ることないの？」

「！」

瞬間、綾を取り巻く空気が変わった。咄嗟に栞は後ずさってしまう。

「大海くんの記憶喪失は聞いてたけど、何で綾のことを全く教えてないわけ？ 理由を教えてよ。栞ちゃん」

綾はあくまで笑みを崩さないが、言葉の重圧は外見と全く似て非なるものだった。

栞はその重圧に耐えるように、唇をキュッと噛み締める。

確かに、栞は大海に綾についての情報を一切教えなかった。

その理由などわかりきっている。

栞が綾に嫉妬していたからだ。

自分の想い人に好きな人のことを教えてしまったら、栞はおそらく眼中になくなり、その好きな人——つまり今回で言う綾のことばかり大海は気にしてしまうだろう。

今までだってずっと辛い思いして来たのに、またそれを繰り返すなんて嫌だ。

自分だけを見て欲しい。

栞のそんな願望から、大海に綾のことは教えなかったのだ。

わかっている。

自分がやったことは、最低で卑怯なことくらい。

でも、その願望を抑えることは出来なかった。

「なんてね」

「え？」

ところが、綾ははたまたまいつも通りの笑顔に戻っておどけて見せた。

「怒ってないの？」

栞が恐る恐る尋ねる。

「そんなの怒るわけじゃないじゃん。栞ちゃんが大海くんのことを好きなのはわかってたし。それに、もし綾が逆の立場だったら、多分栞ちゃんと同じことをしたと思う」

「綾……」

「でもね——」

綾は栞をビシッと指差し、宣言する。

「綾だって大海くんが好き。こうして大海くんに会いに来たのだったそう。だから、あんたに大海くんを譲る気はないから！」

「私だって、負けない」

綾の宣言に、栞は負けじと言い返す。

二人は不敵に笑い合い、親友から好敵手ライバルに変わったことを感じていた。

「綾たち、今日から敵だね」

「え？」

「綾はまだ栞ちゃんのこと怒ってはいずとも、許しちゃいないんだ。

だから、栞ちゃんは今日から敵」

大海に綾のことを言わなかったのは、完全に栞に非がある。

栞は綾に敵と見なされても、何も言い返すことは出来なかった。

「ばいばい」

綾は踵^{きびす}を返すと、栞に別れを告げた。

栞はその遠ざかっていく背中を追い掛けることはしなかった。

もう昔のような関係には戻れない。

その事実が、栞の足を重くしていた。

第6章 日常の崩壊(6) (後書き)

遅れてしまつてすみませんorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5965p/>

await

2011年5月7日17時10分発行